

【完結】 ノン・プレイヤー・ストーリー 【オバロ二次】

taisa01

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この世界、ユグドラシルのNPC達は自我を持ち生きている。AIなどのプログラムで定められたことは行動指針として、設定は性格付けなどとして反映される。また環境設定変更によるNPCの行動範囲変更は、環境適用作業として認識されている。

ただしプレイヤーの前では口をつぐみ定められた行動しか許されない。

この物語は、そんな世界で生きるNPC達のお話である。

目次

プロローグ	1
第一章 NPCの日々	
第一話	6
第二話	10
第三話	14
第四話	19
第二章 戦力差四十倍の防衛戦	
第一話	23
第二話	27
第三話	31
第四話	34
第五話	38
第六話	42
第七話	47
第八話	51
第九話	53
第十話	58
第十一話	61
第三章 フォールン・エンパイア	
第一話	66
第二話	69
第三話	72
第四話	79

最終話A エンド	105
最終話B エンド	98
第二話	93
第一話	88
第四章 その先	
第六話	85
第五話	82

プロローグ

——DMMORPGユグドラシル。

仮想空間没入型RPGの一つで、無駄ともいえるほどあるスキルや種族の組み合わせ、十の数十乗という生産アイテムの自由度、なにより遊び尽くせぬほど広大なマップ。日本国内でもっとも人気のあるタイトル。

——ナザリック地下大墳墓

ユグドラシルにおいて、ある意味で有名なギルド「アインズ・ウール・ゴウン」の拠点。もっとも、ギルドメンバー達の隠蔽工作により、ナザリックをギルド拠点としていることは世間には知られていない。

そんなナザリック地下大墳墓は、様々な理由によりギルド拠点として最高に近いポテンシャルを持っている。加えてそのポテンシャルを最大限まで活かすようにギルドメンバーが妥協せず全力でカスタマイズしてしまったため、維持費は膨大なものとなってしまったのはある意味で当然の流れだろう。

「じゃあモモンガさん、お先々」

「お疲れ様です」

全力稼働させた場合に限り。

普段の維持費はそれほどではない。

言葉を選ぶことはできるが、アインズ・ウール・ゴウンは、いわゆる品の良いギルドではない。最強最低のDQNギルド。悪を自称する厨二病PKギルド。希少な鉱石を産出する鉱山を専有し、流通問題を起こしたギルド。身から出た錆という言葉に相応しい悪名の数々のため、いつ敵対ギルドから攻撃されるかわからない状況といえた。そのためギルドメンバー達は日夜自身の研鑽の合間にギルド資金集めに余念はなかった。

今日も、アインズ・ウール・ゴウンのギルドマスターであるモモンガは、ギルド維持費集めとレアアイテム集めを兼ね備えた通称「デイリー回し」を、ギルメンらと行っていた。

「あれ？ ホワイトブリンさんに、へろへろさん乙です」

ルーチン作業ともいえる稼ぎを終えたモモンガは、仲間と別れて何気なしに円卓の間を見渡すと、ホワイトブリムとヘロヘロの二人が、NPCの前で手を動かしているのを見付けた。もつとも大量のメイド姿をしたNPCが行列を作り、まるで小学校の身体検査のように流れ作業で対応しているあたり、客観的に見ればそうとうアレなしろものであったが……。

「モモンガさん乙です」

「乙〜」

「お二人とも明日休日ですけど、こんな時間までどうしたんですか？」
モモンガは、骸骨の体を覆い尽くす巨大な装備を揺らしながら二人に近づく。

「いい感じなフリルのテクスチャができたので、一般メイドのデザインをパターン分けしてアップデートしてたんですよ」

「で、私はついで行動AIのバージョンアップをしました。一般メイドはいままでランダムに移動させるだけだったけど、メイドっぽい自動行動とか追加しました」

「お二人とも好きですね〜」

モモンガは二人に心底感心しながら称賛を口にする。ホワイトブリムは漫画家、ヘロヘロはプログラマーと、今やっていることと似たようなことを仕事でもしている。しかし、仕事でもないゲームの中でさえ率先してやっているのだから、本当の意味で好きな事を仕事とした人達なのだろうとモモンガは感じていた。

モモンガは、アップデートが完了したメイドNPCとアップデート前の並んでいるメイドNPCを見比べる。パツと見で大きな変化はないが、歩くメイドの動きに連動して揺れる裾や腰回りを含めた服特有の動きに連動した影。ワンポイントで追加されたレース。細かい仕草や歩くモーションなどあらゆる点が改善されており、人間に見間違えるほどの出来となっていた。

「なんか凄く人間っぽくなりましたね」

「まあ、そのへんは学習の蓄積ですし、外部のモーションや学習データを変換できるようにしたので」

「なにげに、へろへろさんずいことしてますよね」

そんな風にモモンガとホワイトブリム、へろへろは夜遅くまで語り合い、三時を過ぎた頃、それぞれログアウトしていくのだった。

プレイヤーが誰もいなくなつた頃、玉座の間で動き出す存在がいた。

濡れた鴉のような漆黒の翼を持ち、腰まである長い黒髪はしつとりとしたツヤと輝きをたたえている。なにより目を引くのは、その女性らしいプロポーションと黄金の瞳。もし現実にこんな存在がいれば、それこそアークロジを運営する企業上層部の人間が、それこそ重さで量る札束を積み上げ、美麗な誘惑の言葉を積み重ね恋人なり愛人なりに迎えようとするだろう。

もつとも彼女……NPCのアルベドは、そんなものに価値を感じることはない。

そんなアルベドは、プレイヤーが誰一人としていないナザリック地下大墳墓の最奥、玉座の間からナザリック内の各所にいるNPC達に連絡をとっていた。

「シャルティア。第一層から第三層に異常はないかしら?」

「無いであります」

「では、あとで第四層のガルガンチュアに問題がないか、確認をしてきてもらえるかしら?」

「今、ヴァンパイアブライドを一人向かわせたであります。何かあれば報告があがってくるでありますよ」

「お願いね」

アルベドは会話が可能な階層守護者に一人一人確認をとっていく。また第四層守護者ガルガンチュアはゴーレムのため自意識というものがほぼ無く、会話が成り立たないものがある階層には、近場の階層から確認をさせるように指示をする。

「コキュートス。五層はどうかしら?」

「問題ナイ。来客モナイ。タダ維持費対策デ、一時的ニフロア全体ノブリザードガ停止サレタ」

「あら、魔獣などの再配置は？」

「不要だ。アレラハドチラノ環境ニモ適応シテイル」

「わかったわ」

アルベドはコキュートスの判断を尊重する。しかし、変更しなかったという事実だけは頭の片隅に記録しておく。別に悪い意味で記憶したわけではない。何かあったとき、変化したとき、同様の判断が必要となるかもしれない。または、その判断を覆す必要があるかもしれない。だから記憶しておくのだ。

「アウラ。第六層に異常はないかしら？」

「あく。今日ブループラネット様が天候を操作したみたいで、魔獣達と対応中」

「あら、応援は必要？」

「大丈夫。天体の運行が変わって、それに影響を受ける子たちの配置を変えてるだけだから。罨や植物のほうの影響は無いみたい」

「そう。じゃあお願いね」

アウラの対応は正反対であった。実際、疑似とはいえ太陽と月の運行の影響を受ける魔獣が第六層には多い。やはり、各層のことは各層の守護者がよく把握しているということなのだろう。

「デミウスゴス。七層はどう？」

「やあアルベド。至って平和なものだよ。ウルベルト様が私室で研究をされていたぐらいで、外部の変化・変更はなかったよ」

「ウルベルト様は勤勉でいらっしやるのね」

「ええ。あれだけの能力を持ちながら研鑽を続けられる精神性。今回も悪魔の多重召喚。十位階魔法のアイテム化を研究されていたようだよ。ああ、あと八層の面々には先程私から確認を入れておいたが、報告事項はないそうだよ」

「あら、ありがとう」

「私は戦時であれば指揮官として腕を振るうことになるが、平時は君の補佐でもあるからね」

アルベドはこのように各階層の確認を行っていると、玉座の間の扉が開き、一人の執事が入ってくる。

「あらセバス。そちらの確認は終わったのかしら？」

「はい、アルベド様。本日はホワイトブリム様とヘロヘロ様が一般メイドらの改変をされておりまして、少々確認に手間取り、報告が遅くなり申し訳ありません」

「あら、今回はどんな改変を？」

「はい。役割ごとに装備の一部変更。あと身体能力などの機能向上などでしょうか」

「さすがは至高の御方々の御業。生命創造のみならず、すでに存在するものに対する肉体操作まで可能とするとは」

「はい。それに合わせまして一部配置転換や行動範囲の変更の指示を賜りましたので、現在対応しております」

アルベドはまるで咲き誇る花のような笑みを浮かべ、プレイヤー達の行動を称賛する。またセバスも表情こそ変らないが、心同じくするところであり、新たに定められた指示を全うするため、部下達に指示を飛ばすのであった。

そう。

この世界、ユグドラシルのNPC達は自我を持ち生きている。AIなどのプログラムで定められたことは行動指針として、設定は性格付けなどとして反映される。また環境設定変更によるNPCの行動範囲変更は、環境適用作業として認識されている。

ただしプレイヤーの前では口をつぐみ定められた行動しか許されない。

この物語は、そんな世界で生きるNPC達のお話である。

第一章 NPCの日々

第一話

シャルティア・ブラッドフォールンは満ち足りていた。

不敬とわかっていても、情愛を向ける創造主から確かなる絆を感じることができ環境。

己の隙間を埋めるように、自分というものを形作られる喜び。

これらを当然のように与えられる日々を享受して、不満に思うはずなどありはしない。もつと子供のように思うこともあるが、その欲求すら幸せを感じるのだから、満ち足りているのだろう。

「設定には趣味趣向と現在のナザリックにおける立ち位置は書いたけど、やっぱりキャラ付けには出生や過去のエピソードが必要だよな」シャルティアの創造主であるペロロンチーノは、腕を組みながら考え込む。バードマンの特徴ともいえる鳥と人が融合したような姿は、死体愛好家であるシャルティアの趣味とは程遠いが、「この人は例外」と言わんばかりに特別視していた。

人間的な感情で解釈するならば、普段の趣味嗜好と惚れた相手は別。ということなのだが、シャルティア本人はそれを理解できるほど、感情面で成長していないことからの戸惑いであった。だが、「ペロロンチーノを前に一定時間立っている場合、嬉しそうに微笑みをうかべる」という行動を最近設定されたため、それらの迷いを捨て一時の喜びを表情で表現していた。

ペロロンチーノは、シャルティアが微笑む仕草を見て嬉しそうにつぶやく。本業ではないが、自分で納得いくまでモデリングし、加えて友人の手を借り、完成させたシャルティアの外装モデリングは、一言でいってペロロンチーノの願望の具現化。好みのストライクゾーンである。

そんな外見に加えて人間に見紛う仕草で微笑みを向ければ、でてる感想など一つである。

「やっぱり俺の嫁はかわいいな」

その言葉にシャルティアは禁を破って抱きつきたくなる衝動に駆られるが、ぐつと耐え、許された行動の中で精一杯の愛情表現を行う。そんなやり取りがプレイヤーとNPCの間でしばらく続くと、プレイヤーが一人転移してきた。

「おつかれさまです。ペロロンさん」

「おつです。モモンガさん」

骸骨のアバターに死霊系を中心とした魔法関連強化装備で身を固めたオーバーロード。アインズ・ウール・ゴウンのギルドマスターであるモモンガが、親友であるペロロンチーノのもとに現れたのだった。

シャルティアは行動指針に従い、すこし離れたところでペタンと床に座る。ここが地下ダンジョンの一角でなく、木漏れ日のさす庭園などであれば、さぞ見栄えのする仕草だろう。しかし、そのへんの判断基準を持たないシャルティアは、座ると二人のプレイヤーを静かに見上げる。

「調整ですか？」

「ええ。戦闘AIの調整に合わせてスキル構成を見直した時、設定欄が結構空いてるなって思いました」

「そういえば、最初に作った時かなり書き込んでましたけど、あれどうしたんですか？」

「流用できるものは流用したけど、いろいろ冷静に考えると整合性がとれてないんですよね」

「整合性ですか？」

「ええ、実際この部分だけ……」

モモンガとペロロンチーノは、シャルティアの設定をみながら、楽しそうに意見を交わす。見られているシャルティアは、ペロロンチーノに、それこそ全てをさらけ出したとしても喜び以外の感情は浮かばないだろう。しかしモモンガとなると、気恥ずかしさが上回る。

表情に出さぬように。

声に出さぬように。

「このスキルだと……」

「でも、この設定からするとこのスキルは外せないんじゃないですか？」

そんな風に会話する二人に羞恥心を刺激されるシャルティアは、先程とは違って逃げ出したい、穴があれば入って隠れたい気分には苛まれていた。ペロロンチーノが惚れた相手であるならば、モモンガは好みの相手であり、自分の中身をそれこそ赤裸々に見られているような状態なのだから、どのような心境かは想像に難しくないだろう。

「そういえば、先日新作のエロゲーを買ったんですよ」

「ああ、この間期待の大作って言ってたヤツですか？」

「そうそう」

シャルティアのスキルや設定の意見交換がしばらく続くと、自然と雑談へと二人の話題が移っていった。

「でも、それに姉ちゃんが出てたんですよ」

「あく。お姉さんというか茶釜さんがでてたら、つかえませんかよ」

「キヤラも立ってて日常パートの出来が良いただけ残念で……」

「茶釜さん人気声優ですから、しょうがないですよ」

実際にはリアルでペロロンチーノが購入した十八禁ゲームの話題なのだが、シャルティアには、エロゲーというものが何かわからなかった。ただ、モモンガとペロロンチーノが期待の大作というのだから、すばらしい作品が存在する事。そしてペロロンチーノの姉にして同じ至高の御方であるぶくぶく茶釜様が、その素晴らしい作品の作成に関わっていたという事を理解した。もともと、その素晴らしい作品にぶくぶく茶釜が参加したことで、何がつかえなくなっただけのかまでは分からなかったが……。

「あ、そろそろ他のみんなが集まる時間ですね」

「じゃあ移動しますか」

そういうと、二人は姿を消す。

それとほぼ同時だろうか、シャルティアは深く息を吐く。

なにか問題があったわけではない。ただ緊張を伴う幸せな時間が過ぎさったことにより、糸が切れただけのことだ。

もし、自由に行動することができたなら。

もし、自由に言葉を交わすことができたなら。

許されないとわかっていても、そんな日が来ることを願うシヤル
ティアであった。

第二話

第二話

アルベドは身じろぎする事無く、叫ぶ事無く、時が経つのを静かに待っていた。

玉座の間。

ナザリツク地下大墳墓の最奥、ワールドアイテムでもある玉座の右脇。

この場こそがアルベドにとってあるべき場であり、アルベドの知る世界であった。なぜなら、ここ以外の場所に出た記憶は一度だけ。この場以外の場所があると知識はある。しかし実感するには事例が少なすぎた。

そんなアルベドは守護者統括という立場を至高の御方、創造主より与えられている。しかし待遇という面では、同格の他守護者達とは比べ物にならないほど酷いものであった。他の守護者はそれぞれ館であつたり、世界樹や迷宮に併設されたプライベートフロアであつたりと、生活に即した様々な部屋を与えられていた。またアルベドの姉妹とも言える者たちも、プライベートフロアが与えられていた。もっとも、末の妹は未だ創造主であるタブラ・スマラグディナの調整中のため顕現に至っていないので例外といえるかもしれない。

その意味では、ほとんどNPC達はプライベートスペースを与えられている中、それを持たぬアルベドは自身をどう認識しているか。

結論は、気にもしていない。

なぜならば、アルベドが生み出され最初に設定された命令は、

——玉座の右脇に立つ事

——万が一、敵が玉座の間に侵入した場合、排除行動を取る事

この二つであり、今も設定されている行動指針^Aはこれだけ。そもそもアルベドにとって世界とは、ナザリツク地下大墳墓の奥深く、玉座の間が全てなのだ。

そんなアルベドの創造主であるタブラ・スマラグディナは、ギルメ^Aンからも設定魔として知られていた。そんな彼がアルベドに私生活

を意味するようなモノを与えなかったのは、アルベドに対しては別の考えを持っていたからにはかならない。

ナザリックの防衛という観点では、畏部屋込みで生み出したアルベドの姉にあたるニグレドと、今頭を悩ましている第八層に配置予定の末の妹が当たるものと考えていた。

そしてその認識は間違ったものではない。

ギルドダンジョンの最奥。玉座の魔に突入されている時点でギルド防衛は失敗なのだから。なんとかギルド武器を防衛できれば、再起をはかることもできるだろう。その場合、最後の時間稼ぎを行うのが防衛に特化したアルベドの役目である。もちろんそんなことを設定に書くものではない。タブラ・スマラグディナにとって遅滞防衛を主眼としたスキル構成とAIが完成したアルベドは、すでにナザリックにおける役目としては完成しているのだ。

ではタブラ・スマラグディナにとってのアルベドの価値とは？

——設定をアレコレ考えるための最高の題材でありキャンバス

「ふむ」

今日も今日とて、タブラ・スマラグディナは設定の出来を見ながら小首をかしげ、アルベドの設定を書いては消してを繰り返していた。

タブラ・スマラグディナは後衛職であり錬金術を軸とする生産職でもある。生産には大量の素材を必要とする。もちろんギルメンは素材集めを手伝ってくれるが、やはりその多くは自分で集めることになる。その単調な作業を長続きさせる秘訣として、タブラ・スマラグディナが決めたのは「無理のない数を定期的に」である。そして手が空くと、今日のようにアルベドの設定を見直しては書き直すことを繰り返していた。

彼にとつて、アルベドは魅力的な題材だ。騒々しくも楽しい仲間と作り上げたナザリック地下大墳墓。その守護者統括という位置付けの美女。ペロロンチーノのように自分の担当したNPCを嫁と公言するような感覚ではないが、少なくとも作品として愛着を持っている。だからこそ、設定として登録可能な文字を一字たりとも無駄に

せぬように、書きなぐり、見直してはさらに書き直すことを繰り返していた。

「さて錬金術用語からアルベドと名付け、外見も関連付けた。姉妹との関連性で名前を作ったが、設定にもなにか盛り込むべきか？ いや名は体を表すという。故事に倣うならば、意味付けを持たせるべきだろう」

タブラ・スマラグディナは、手を顎の下におき考えこむ。

もしこの場に第三者がいれば、巨大な蛸を頭から被り、水死体のような目と体、そして締め上げるような革鎧、そんなブレインイーターの姿は、まるで捕食するための前動作にしか見えないだろう。

そんな状態でも、アルベドの見る目は変わらない。

「しかし、どこまで表すべきか」

タブラ・スマラグディナは設定ツールを起動しキーボードを呼び出す。

アルベドは、動けぬまま、声を出せぬまま、ただ目の前にある姿を受け入れる。

「そう考えると、昨日追加したニグレドとの関係性は邪魔だな。アルベドという名はヘルメス主義における意識変容の段階を表す。しかし大いなる御業の観点からは物質面での意味、月、銀、復活か」

タブラ・スマラグディナはそう言いながら、アルベドの設定からニグレドの記述を消し去る。

その瞬間、アルベドにとってニグレドは他人となる。アルベドという個において、ナザリックでも比較的親しい存在が削り取られる。

苦痛は伴わない。

アルベドは、ただあるがままに受け入れる。

それが、アルベドにとつての日常だからだ。

いままでの自分を支えた記憶が削りとられる。例えば消えたそこに大切なものがあつたかもしれない。好ましいものがあつたかもしれない。おぞましいものがあつたかもしれない。しかし、アルベドは等しく忘れていく。

ゆえにアルベドという存在は、記憶というものに価値を見出してい

ない。個を示すプライベートにかかわるものに価値を見出していない。

アルベドの設定に書かれた最初の一文

——彼女はナザリック地下大墳墓守護者統括という最高位たる地位につく悪魔であり、艶やかで長い漆黒の髪と黄金の瞳を持つ傾国の美女である

幾度も削り取られる記憶の中、唯一最初に書かれた時から変わらぬ一文

ナザリック地下大墳墓における守護者統括という職務。

それが全てにおいて優先する事項。

設定に幼き時の楽しい思い出が書かれたことがあった。家族と過ごした幸せなエピソードが書かれた時があった。その一つ一つは綺麗な記憶だったかもしれない。

今後、仲間との関係性について書かれるかもしれない。出生について書かれるかもしれない。

だが、アルベドにとっては等しく価値のない事。なぜなら、一瞬で書き換えられる記憶や過去など等しく無価値なのだから。

だから、今日もアルベドはタブラ・スマラグデイナの設定改変を受け入れる。いつか、最後となる日を、存在する意味が書き込まれる日を待ちながら。

第三話

ナザリツク地下大墳墓 第六層 巨大樹

一部のギルメンは世界樹などと呼ぶこともある迷宮を内包する巨大な樹。

今日その一室に、アインズ・ウール・ゴウンに所属する三人の女性プレイヤーが集まっていた。

「やっぱ人間型に変えてよかったわ。服とかオシャレなの着れるし」

NPCのペストーニャ・S・ワンコを前に、創造主である館ころもちもちが自画自賛する。

「あんちゃん。前までまんま犬だったよね」

「たしかあんちゃんが昔飼ってた犬に似せてだっけ？ かわいかったと思うけどなんで変えたの？」

館ころもちもちの言葉に続くように、ピンクの肉棒のようなねん粘体のアバターを持つぶくぶく茶釜と、半魔巨人のやまいこが続ける。

「九層所属NPCの役割決めようぜってホワイトブリムさんがみんなをあつめて、ペスがメイド長になった。やまちゃんは欠席だったけど」

「まんま犬キャラをメイド長に押す男性陣の思考回路がおかしい件について」

「まあ、いつものノリで決まったとおもうよ？ やまちゃん」

九層所属のNPCは存外多い。

たっち・ミーのセバス・チャンや、戦闘メイドと分類されるやまいこのユリ・アルファなど。中には豪華な九層の外観に合わせるため、低レベルのNPCメイドも多数存在する。その中で当時二足歩行とはいえ完全な犬の姿であったペスがメイド長と決定された。

誰もが、途中でネタに走っているオーラを感じていたが、ストツパーのモモンガがその時参加しておらず、みんなが決めたら従うと普段生真面目なたっち・ミーが静観にまわってしまったため、結果的にペスがメイド長となった。ちなみに同じくレベル一のイワトビペ

ンギン姿のエクレア・エクレール・エイクレアーが執事助手であるあたり業が深い。

「で、どうせ決まったならメイド服を着せたいなくって思っただけ、みんなに手伝ってもらって人型にしてみました。ただベースがホームンクルスだから、中身は触手やら怪しいところあるけど見た目は人体」

「じゃあ、その気合が入りすぎてどう見てもプロの仕事ですごめんなさいって感じのメイド服も？」

「うん！ ホワイトブリムさんの新作」

「へ」

「いいな」

うれしそうにペストーニャ・S・ワンコを見せる館ころもつちもちを見て、ぶくぶく茶釜はアウラ・ベラ・フィオーラを。やまいこはユリ・アルファをそれぞれ呼び出す。

「じゃあ、三人でメイド服とか、服交換とかもできるんだ」

「小柄なアウラの服も、データ補正で長身なユリに着せることができるところから、この辺デジタルって楽だよ」

「まあ、リアルじゃあちよいとこんな感じにはできないけどね」

「この辺はゲームの楽しみだよ」

そんな風に三人は、いろんな服を取り出しコーデイネートするようにNPCの着せ替えをしつつ、楽しそうに話をつづけ夜が更けていくのだった。

「じゃあ、そろそろあがるね」

「あつ 私も」

リアルの時間で〇時。十二分に遅い時間だが一人、また一人とログアウトの準備をはじめめる。

「あれNPCってこのままでいいんだっけ？」

「拠点設定してあれば、自動的にそこを中心にランダムで動くから。ギルド内ならしばらくすれば、どこからでも自分の持ち場にかえるよ」

「へ。でもなんでかぜつち知ってるの？」

ふとした疑問を館ころもつちもちが口にする。それに何でもないことのように、ぶくぶく茶釜は答える。

「この間第二層に放置した時、気が付いたらここに帰ってたから。で、AIに詳しくそうなへロへロさんに聞いたら、そう初期設定がされてるんだって」

「とてとて歩きながら九層に帰るのかな？」

「ペスもユリも九層だから、並んで歩いて帰る……案外かわいいかも」

NPCの拠点設定。加えてランダム行動の許可をあたえることで、NPCは拠点を中心にランダムに動き回る。これは防衛NPCが巡回するようなプログラムの初期設定である。そしてこの機能は何らかの理由で拠点から大きく離れた場所にNPCを放置されると、もとの拠点に戻るため移動を開始する。そんなロジックとなっているのだ。

今の場合ではペスとユリが二人、ゆっくりとおしゃべりしながら九層に帰るシーンが、女性陣の頭の中で再生された。

「おっと。じゃあこんな時間だし落ちるね〜」

「わたしも。おつかれさま」

「おつかれさま」

そして三人がログアウトしてしばらくすると、残された三つの影が動き出す。

「うくん。せっかくだからユリもペスもゆっくりしていく？」

「アーちゃんお願いできる？」

「私もお願いします……わん」

アウラ・ベラ・フィオーラがひらひらのメイド服の裾を翻しながら声をかけ、ユリ・アルファとペストーニャ・S・ワンコが答える。

アウラは併設されたキッチンから、適当な銘柄の紅茶のセットとクッキーを盛った皿を取り出す。この辺のモノは、本来料理スキルで一から作ることもできるが、アウラには料理スキルを持つ余裕はなかった。そのため、定期的に九層の食堂から補充される完成したものを保存棚に保管し、取り出しているのだった。

それでも、ナザリツクで準備される料理はどれもおいしい。

料理長達の腕もあるが、食堂には数多の高級料理器具が配置され図書館には著作権の切れたレシピ本などもあり、それが相まって質の高い料理となっている。

「ペスも人型になったんだね〜」

「はい。やはりこの体の構造は便利ですね。至高の御方々に感謝しなくては……わん」

「でも、その語尾はつづけるのね」

アウラは紅茶を配り、クツキーを盛った皿を真ん中に置き適当なクツションに座る。ペスやユリも、アウラが座るのをまってから、ゆっくりと紅茶のカップを手に取る。

「体が変わるというのは、存外不思議な感覚ではありましたが、館ころもつちもち様が喜んでいただけなのであれば、それに勝る幸せはありません。それに衣装を交換したり着せ替えるあなた達を見ていて、少しうらやましかつたのもありますね……わん」

ペスはもともと普通の犬が二足歩行するような姿をしていた。もちろん創造主である館ころもつちもちの設定したことなのだから不満は無かった。

しかし創造主たちの女子会の時、こんな風にアウラやユリもいっしょにあつまると、二人を着せ替えたり、ポーズを取らせてかわいがったりという姿を見ていて、少しうらやましいとも感じていたのだった。

「それをいったら、前の姿の貴方は、至高の御方々によく抱き上げられて頭を撫でられてたではないですか。そんなことを許されているのは、実質あなたとエクレアだけよ」

「ユリの言う通り！ 私もぶくぶく茶釜様に抱き上げられて、頭を撫でられたい！」

「まあまあ」

ユリとアウラが言う通り、完全な犬の姿だったペスは、創造主である館ころもつちもちとはもとより、女性陣二人だけでなく、他のプレイヤーからも良く頭を撫でられたり、抱き上げられたりしていた。もち

ろんプレイヤーは抱き上げたからといって、モフモフの触覚を楽しめるわけではないのだが、やはり見た目の印象が強く、すこし幸せな気分となる。そのため、ギルメンの中でペスは人気だった。

もつとも今回の人化は、その場のノリでみんなが賛成していたが、一部モフリ愛好家は残念に思っていたのは知られざる事実だ。

「でも、アーちゃんが着てるペスのメイド服……すごいわよね」

「さすがは至高の方の一点ものね」

「首回りの金の刺繍とか見たことないデザインですから、完全新作なのでしょよね」

「でもこれで掃除とか大変そうだね」

「まあ、そのためのエプロンなのですが、それにつかわれるレースもまるで芸術品のようなデザインなので、なかなか大変です」

今はアウラが来ているペスのメイド服を見ながら口々に感想を言うなどとりとめのない話が続く。

気が付けば紅茶もすすみ、クッキーもなくなっていた。

「じゃあ、そろそろ持ち場にもどるわね」

「そうね」

「ああ、じゃあ服返さない」と

そういうとアウラはおもむろに脱ぎだす。全員が服をシャツフルしている状態なのだから、当たり前前の事。なによりペスとユリも同じように服を脱ぎ、誰にも見せることもないあられもない姿をさらしている。

「はいペス。どうせ戻ったら洗濯するだろうけど」

「まあ、予備の服はありませんし、別に私たちの間で服の交換が嫌ということはありませんよ」

「なんだかんだと、私とアーちゃんは何十回もやってるしね」

それぞれが自分の服を着ながらそんなことを話す。

——これが彼女達の日常であった

第四話

ナザリック地下大墳墓 第九層 B A R ナザリック

ナザリックにおける第九層の位置付けは、ギルメンのプライベートエリアと共通フロアにわかれ、共通フロアには円卓の間などもあるが、それ以上に食堂や図書館、スパなど各種福利厚生施設が軒を連ねている。

その福利厚生施設の中に、まるで隠れるようにひっそりと佇む小さな店が一軒。木の重い扉を押し開けると、そこには品の良いB A Rがある。シックにまとめられたマホガニー製のカウンター席。六人かけのテーブル席が少々。けてして広くはない店内だが、観賞用植物や店に流れるB G Mも相まって、外とは隔絶した空気を楽しむことができる。

「いらつしやいませ」

声をかけられ視線を向けると、一人のバーテンダーがグラスを磨きながら佇んでいた。

「開いてますか？」

「はいデミウルゴス様。カウンター席にどうぞ」

第七層の守護者であるNPC、アーチデビルのデミウルゴスはゆつくりとまるで決まっていたかのようにカウンター席に座る。隣にはちやうど第五層の守護者であるNPC、蟲王のコキユートスがビール・カクテルを傾けていた。

「コンナ場所デ会ウトハ、珍シイナ」

「そうですね。お互い守護階層が違いますから、なかなかこうして顔をあわせる機会自体珍しいといえるでしょう」

デミウルゴスが席に座ると、小皿が置かれる。クルミや数種類の豆に塩を振ったシンプルなお通しがおかれる。

「ミックスナッツです。お飲み物はいかがなさいますか？」

「任せるよ」

「かしこまりました」

デミウルゴスはバーテンダーに注文すると、間をおかずに赤いスパークリングワインが置かれる。透き通る赤に揺らめく泡。グラスを近づければフルーティーな香りが鼻孔をくすぐる。

「銘柄は？」

「宮崎産のスパークリングワイン・レッドにございます。濃厚な甘やかな香りと、ドライハーブを思わせる風味が特徴にございます。疲れたお体を癒す最初の一杯には良いものかと」

デミウルゴスはバーテンダーの話を聞きながらグラスを傾ける。ブルーベリーやプラムのような香りだが、しっかりとした味が舌を楽しませる。なにより、よく冷えたスパークリングが、喉を楽しませる。

「良いセレクトですね」

「ありがとうございます。料理などはいかがでしたでしょうか？」

「そうだね。コキユートスと食べれるものをもらおうか」

「かしこまりました」

バーテンダーは注文を受けると、素材を取り出し料理の準備をはじめる。

デミウルゴスは、それを横目にコキユートスに話しかける。

「おまたせしました」

「ナニ、ココデノヒト時ヲ楽シンデイルダケダ」

「そうですね」

二人はゆっくりとグラスを合わせる。

チン

小さな音が店内に響き渡る。

いまこの店には、デミウルゴスとコキユートス、バーテンダーのほかに、奥のテーブル席でビール片手にポテトの山盛りをアメリカ人のように大量のケチャップで食べるヴァンパイアとワーウルフがいなかった。

たしかに職権ではデミウルゴスとコキユートスは上位者であり、奥の席の者たちは下位のため礼を尽くす必要があるかもしれない。

しかしここは酒と料理の一時を楽しむ場所。

無粋と考え、二人は何も言わなかった。

「今日は至高の御方からの呼び出しでしょうか？」

「アア。新シイ武器ヲ賜ツタ」

「それは良かったですね。私もウルベルト様より新たなアイテムを賜りました」

「ホホウ」

二人は今日、この場であったことを情報交換する。

しかし、それぞれ別のことを知覚していた。

「最近のナザリックをどう感じておりますか」

デミウルゴスは空いたグラスを置き、ながら問いかける。

「戦ノ前」

「なるほど、武人たる貴方らしい感想ですね」

コキュートスの回答に、薄い笑みをうかべながらデミウルゴスは、琥珀色のウイスキーを受け取る。

「北ハイランドのダルウィニーにございます。数々の銘酒の原酒となった作品です」

デミウルゴスはまるで呷るように半分ほどを飲み干し、喉から湧き上がる香りを楽しみながら言葉を選ぶ。

「ナザリックの総力戦がはじまるかもしれませんね」

「ソウ感ジタカ」

「ええ、少し前までの至高の御方々は覇気が若干なくなっておられました。数多くの宝、力を手に入れたことで目標を見失っているようにも見えていましたが、今日のウルベルト様は違いました。そう私達が生み出されたころの、ギラギラとした瞳をされておいででした」

「武人建御雷様モ同ジダ」

実際、二人が感じていることは正しい。最近までアインズ・ウール・ゴウンの面々はワールドアイテムの収集に始まり、鉱山の占有、レイドボスの撃破と数多くの冒険や成果を積み重ねてきた。そしてギルドとしても当初から人数が増え四十一人となり、ある意味で絶頂期を謳歌していたのだ。

しかし、ちようど公式イベントの切れ目とリアルが年度末が近いこともあって、若干中だるんでいたのも確かだ。

NPCたちもその空気を読んでいた。

もつとも、それに対して何もできない事を歯がゆく感じていたところに、今日の出来事である。

「ええ、楽しみでしょうがありません。我が智、我が技、すべてを賭して至高の御方々にお仕えすることができるのですから」

「アア、ソノ通りダ。我方武。我方忠義。存分ニ發揮シヨウゾ」

二人は近付く闘争の前に、抑えられぬ熱を感じるのであった。

それが後の歴史で千五百 対 四十一。戦力差四十倍の殲滅戦と記録され、アインズ・ウール・ゴウンを一つの伝説にまで押し上げることとなることを、まだ二人は知らない。

第二章 戦力差四十倍の防衛戦 第一話

ナザリック地下大墳墓は、にわか騒々しさを増していた。

いままでは、数多いNPC達もその与えられた職務を全うすることのみに務めていた。

しかし、今は違う。なぜなら、今までになかったことが起ころうとしているからだ。

特に戦闘力を与えられたものは、その武にて忠義を果たすことができるかもしれない機会に、心のどこかで歓喜し、無表情であるはずの顔のどこかに浮足立った表情を読み取ることができるとだ。

「一般メイドらから報告が上がってきました。どうやら至高の御方々は、外部の敵勢力に対し情報戦を仕掛け、有利な自陣営、つまりナザリックでの決戦を考えているようです」

「フム。その報告は私からアルベド様に上げておきましょう」

「はい。お願いいたします」

「また何かありましたら、報告をお願いします。一般メイドや九層で侍るあなた方プレアデスの面々は、至高の御方々のお言葉を耳にする機会が多いのですから」

「はい、かしこまりました」

九層の一室。NPCセバス・チャンは同じNPCユリ・アルファから報告を受けていた。

プレイヤーの面々が集まり会議をする時は、決まって円卓の間で行われる。また設定変更作業なども円卓の間の自席で行われるのがほとんどである。

どちらの場合においても、九層をランダムで動き回る一般メイドやプレアデスは、会議の時なども含めて、その場においても一切怪しまれることはない。そもそも、メイドとは侍るものである。普段はまるで家事をしているようにランダムで動き回り、プレイヤーの姿を感知すれば部屋の隅に控える。そんな風にAIが組み立てられているのだから、プ

レイヤー達は不思議にも思わない。

むしろ、大量の一般メイドを作り出した三人のプレイヤーに至っては、その動きの素晴らしさ、侍ることによってもたらされる雰囲気、幸福感すら得ているのだから本当の意味で問題にはならない。

もつとも、そんな彼女達がNPC達にとつて至高の御方々の動向を知る情報源となつているとは、探られているプレイヤー達でさえ考えつかないことだろう。

「では、早めに報告に向かうとしますか」

セバス・チャンは背筋を伸ばし、静かに第十層に向けて移動を始める。

第九層は主に至高の御方々のプライベートフロアである。権威、財、技術の高さ、美的感覚などあらん限りを詰め込まれた比類なき空間。それを維持する一助として働くことはセバスとしても、この上ない喜びであった。

そんな第九層から、アルベドのいる第十層に向けてゆっくりと歩みをすすめていると、ちょうど第八層に続く階段から降りてくる人物に気がつく。

「これはシズ。任務の帰りですか？」

セバスからの問に、歩みを止めたシズは静かにうなずく。

セバスがシズにこのように聞くのは、シズの特異な立ち位置にある。シズは設定上、全ての罨やリドルなどを把握していることとなっている。それを裏付けるように、プレイヤー達は罨やリドルの情報をシズの設定に書き込むことで、自分以外のメンバーにも情報共有を行っているのだ。

シズ自身も、多くのプレイヤーに必要とされる現状を好ましく思っている。覚えることは大変だけど、至高の御方々が手伝ってくれる。そして、分からなければシズに会いに来てくれる。それは、仲間たちにはない自分だけの宝と思っている。だからこそ、今回のような罨「そうですか。何か変化はありませんでしたか？」

「あった」

「どのようなことか教えていただけますか？」

「第一層から第三層にかけて、転移罫などかなりの数のトラップが追加された」

「なるほど。シャルティアへの連絡はもう終わってますか？」

シズは小さくうなずく。

「そうですか。それはよく出来ましたね」

セバスは右手をシズの頭に伸ばし、軽く撫でる。シズも無表情のままであるが、若干気持ち良さそうに受入れる。子供扱いをセバスはしているわけではないが、このような場では小さな娘にはこうすべきというたち・みーによって刷り込まれた印象があったため、それを実行しているにすぎない。もともと設定にすら書かれていないのに、創造主に似た行動を取るあたり、NPC達にとって、創造主がどれほど特別なものかがい知れることだろう。

「では、アルベド様に報告がありますので、これにて」
「うん」

セバスはしばらくシズの頭を撫でた後、何事も無かったかのように姿勢を正し、十層の玉座の間へと歩みをすすめる。

シズは、そんなセバスを見送ると九層を歩き出し、特に理由はないが食堂に足を向ける。

そこには数名のメイドが休憩というか食事を取っているように見える。これもメイドにこれ以上ないほど愛情を注ぐ創造主の涙ぐましい努力のAI^{結晶}である。

そんなメイドの中にシズは見知った顔があったので近付く。

「ルプー、ナーベ」

「おかれ〜」

「お疲れ様。シズ」

同僚であり同じプレアデスの役職を持つナーベラル・ガンマとルプスレギナ・ベータである。二人とも、食事をしていただけだろうかすでに空いた皿が置かれ、飲み物を片手に会話を楽しんでいたようだ。

シズも奥の料理長から専用の合成溶液を受け取ると、二人に向かい合うように座る。

「今日は上に行っていたのですか？」

「うん。いっぱい変わったから記録してきた」

「そう。おつかれさま」

ナーベがシズに話しかける。シズが長期に九層を離れるのは、だいたい罨やリドルが変わる時と認識しているからの一言だが、ある意味でお約束のようなやり取りを繰り返す。

「ルプーは第三層より上に行っちゃだめ」

「へ？」

「だいぶ変わった。また罨に掛かって怒られたくなかったら、いかにいい方がいい」

「だくいじょうぶつすよ。シズは心配性つすね」

ルプーはシズの忠告を笑いながら流す。

だが、しばらく前NPCでありながらフレンドリーファイアが無いはずの罨に、なぜかルプーはひっかかり、創造主を含む数名の頭を悩ませたことがあったばかりだ。もっとも本人はすでに過去のこととしているので本当の意味で気にしていない。

そんなルプーをシズとナーベはあきれながら見るのだった……。

第二話

ナザリック地下大墳墓 第九層 円卓の間

今日この場、アインズ・ウール・ゴウンに所属するプレイヤーがほぼ全て集まっていた。加えてセバス・チャンや数名の一般メイドが壁際に待っており、まるでリアルのアークロジール所有企業群最上級幹部による経営会議のような雰囲気醸し出されていた。もつとも円卓に座るのは人間の姿をしたものは一人もおらず、全員が異形種ばかりであったが。

「では、ナザリック襲撃イベントの開催について決を取ります。本日欠席のたちさんとガネットさんからは、メールでギルマス委任をいただいております」

今日、円卓の間ではギルドマスターであるモモンガの発議で、新たなイベント案の議決が取られようとしていた。

内容は完成してしばらくたったナザリック地下大墳墓の公開。そして敵対ギルドを誘引し、難攻不落であることを見せつけ、その後の襲撃を躊躇させる材料とするといったものである。

一部では慎重論がでていた。

絵にかいた餅である。

そもそも撃退できない規模の攻撃となった場合どうするのだ。

もちろんその意見は正しい。

しかし

「ひゃっは〜！ 俺たちの作ったナザリックで襲撃者全員殲滅してやんYO！」

るし★ふぁーは決の前から氣勢を上げているが、参加者の多くの気持を代弁しているのだからこの問題児が問題児としてアインズ・ウール・ゴウンに所属しつづけていられる所以だろう。

結局のところ、プレイヤー単体ならばいざ知らず、ギルドとして仲間と造り上げたという意識が強いナザリック地下大墳墓で戦うのだ。なによりこのギルド拠点の防衛網は、全員が全力で取り組んだともいえる。それは生産系、戦闘系関係なく、中にはリアルな職業技能さえ

つぎ込んでつくられたのだから、生半可なものではない。

「あく、るし★ふぁーさん。ハッスルするのは決のあとで。では皆さん、賛成の人は挙手をお願いします」

もちろん、いろいろと悪名高いギルドではあるが、加入条件が「社会人であること」である。この手のもめそうな会議はある程度前から根回しがされている。

最終的に出席した三十九名のうち三十六名が賛成。もちろん反対に回ったメンバーも、わかって反対しただけであり、決まれば全力で参加する気持ちで意見を表明しただけである。

「では。ギルドルール。多数決によりナザリック襲撃イベントを開催することとなりました！」

一斉に巻き起こった拍手の音で、円卓の間は満たされる。

もつともその光景を眺めるNPC達の瞳に強い意思が宿っていたのを気付くものはいなかった

プレイヤーのだけれもが寝落ちした朝四時過ぎ。

NPC達は一斉に動き出す。

「第一層から三層、あわせて表層も含めて現在の罫の起動確認をはじめめるであります」

第一から第三層の守護者であるシャルティア・ブラッドフォールンは、配下のヴァンパイアブライド達に指示を出す。そして彼女たちはそれぞれ各所に散り、それぞれを担当するモンスターに対応をさせるのだ。

「問題がある罫は直せるものは修理の指示、直せないものは至高の御方々の御業が必要として分かりやすいようにしておくなまし」

指示を聞き届けるとヴァンパイアブライド達は一斉に動き出す。

それを満足そうに見送ると、自分の装備の確認を行う。戦闘になれば自分は第三層の聖堂で侵入者を迎え撃つ。なによりいままで入ってきた情報では、至高の御方々と同等の存在が今回の敵というのだ。

「もし第三層にまで余裕をもって侵入してくる敵であるならば、たぶ

ん私は死ぬことになりませぬ」

珍しく間違ったくるわ言葉が抜け落ちる。

シャルティアは、まず創造主であるペロロンチーノを考える。もちろん一対一であれば、戦いようもあるだろう。

だが守るべき第四層への扉、地下聖堂で戦うことを想定すると。敵がわざわざ六名は入れるフロアに一人ずつくるか？ そんなことなどありえない。まず全力で仕掛けてくるだろう。何名か愚か者がいるかもしれないが、希望的観測を戦闘に組み込むことなどできない。

戦闘特化、各種耐性を持ち、回復しながら戦うという長期戦のスペシャリストとして生み出された自分の本能が言う。

「ああ、楽しみでありんす」

ペロロンチーノが丹精込めてつくった顔は、まるで蕩けるような、見るものを魅了する笑顔をしていた。そこに残虐性や嗜虐性はない。純粋な意味でも高揚。戦闘者としてはじめて全力で戦うことに喜ぶ姿があった。

神器級のスポイトランス。伝説級の防具一式。各種回復や耐性を補助するアイテム群。

どれもが逸品である。神話級のスポイトランスは、ペロロンチーノがサブとして愛用していたものを譲渡し、それ以外の防具一式もシャルティアのために新たに準備したものである。

そんなことを言いながらも装備の確認は次々進んでいくと、あることを思い出したのかふと手をとめる。そしてその表情は一気に苦虫を噛み潰したようなものとなった。

「あく恐怖公？ いるでありんすか？」

シャルティアはいやいや恐怖公にメッセージをつなぐ。

「これはこれは、シャルティア様。ご機嫌麗しく」

「世辞は結構。アルベドからの指示でありんす」

「はっ」

恐怖公は紳士である。たとえメッセージ越しであろうとも、背筋を正し、首を垂れながら命令を待つ。

もちろんシャルティアも恐怖公の紳士ぶりを知らないわけではな

い。

が……

「うっ」

「どうかいたしましたか？」

「いえ、なんでもありません。恐怖公は自領域の罨、自眷属の状態などの確認を行うこと。加えてできる限りの情報を得るために、第九層と第十層以外に眷属を展開。至高の御方々のお言葉を集め、アルベドおよびデミウルゴスに報告するであります」

「はっ、早速取り掛かせていただきます」

シャルティアは恐怖公の外見を一瞬想像してしまい、言葉を詰まらせたがなんとか指示の伝達を終え、安堵する。恐怖公のことが嫌いなのではない。しかし女性はあの黒い姿を苦手というペロロンチーノの先入観がなぜかシャルティアにも伝播していたからだ。

もちろん同じナザリツクの仲間である恐怖公を外見で、どうこう言うのは失礼でありひいては至高の御方々への不敬になるとさえ考えられている。しかし苦手という意識もその至高の方から受け継いでいるため、なんとも言えない表情のまま、装備の確認を再開するシャルティアであった。

第三話

アインズ・ウール・ゴウンはイベント開催に向けて準備を加速させている。

防衛における軸といえば二つある。

一本目は各種罠。一度発動した罠はギルド資金を消費して再稼働するが、あえて復活しない罠や、何度でも復活する罠を織り交ぜることで、疑心暗鬼を誘発するもの。ジャングルや吹雪の中、人間心理の隙間をつくような箇所に設置し、ダメージ効果以上に心理的圧迫や疲弊を目的としたもの。そしてかかったが最後、デストラップという名に相応しい即死効果が期待できるもの。

種類は多々あり、どれもこれもバクトルは違えど強力なものである。

もう一本はNPCや傭兵NPC、召喚魔獣などによる戦力の運用。プレイヤーと同じスキルや装備を活用できるNPCはそれ単体でも強力な戦力である。しかしギルド拠点はその規模によってNPCを作成できるポイントが決まっている。ワールドアイテムにて補強されたナザリツクは拠点の規模以上のNPCを保有できるとはいえ、無制限ではない。それを補うのが召喚魔獣や傭兵NPCである。

召喚魔獣はポップすることで戦力として保有し、貯め込むことができる。傭兵NPCは契約することにより配置できる。また若干毛色は違うがゴレムなども傭兵NPCに分類される。これらは維持費の限り増やすことができるが、レベルや行動AIという面ではNPCに一枚劣る。

アインズ・ウール・ゴウンの面々はそれらを調整し、なにより全力稼働させるための資金集めに余念がない。

くわえてNPC達の知りえない情報であるが、敵対ギルドへの挑発、狩場荒らしなどを行いヘイトを積み重ねている。

全ては悪名高いアインズ・ウール・ゴウンが拠点バレした時、襲撃しようという機運にさせるため。理論でなく感情で報復行動をとら

せるための心理戦の一手であった。

しかし忙しいのはプレイヤー達だけではない。

生きているNPCもそれ以上に忙しい。

ナザリック地下大墳墓 第六層 ジヤングル地帯

「い班は迂回して攻撃。ろ班はい班の五秒後に西側から攻撃。は班は、そのまま防御しつつゆっくり後退、罠の位置まで誘導。敵が前進してきたら、に班を迂回させて挟み撃ち」

アウラは鋭く魔獣達に指示を出しながら仮想敵を追い詰める。

しかし、ある程度の動きはできる最初の攻撃にくわわつたい班は良かったが、ろ班は攻撃後撤退に失敗し、反撃をくらってしまふ。そしてタイミングを逸したは班はろ班の救援に向かい乱戦がはじまってしまった。

「あちやく」

「どうしよう。お姉ちゃん」

「マール。みんなを落ち着かせて一回一からやり直そう」

そういうと、タイムスキルで魔獣の意思を一齐に自身に向ける。そして魔獣らを落ち着かせ、全員を引き離す。そして治癒能力のある魔獣らによる回復を行っているあいだ、マールは一体一体首に抱き着いたり、背を撫でたり、声かけながらコミュニケーションをとっていく。

「みんな最初に比べれば良くなったけど、一つは私が指示を出すのが早すぎたね。それに無理に追いつこうとして、失敗しちやっただかな」

魔獣たちに高い知能はない。しかし人間であれば子供程度の知恵があり、アウラの言葉がそのままの意味でないことを理解する。親が子供を気遣うような愛情を向けるアウラに対し、不満をいうものたちはいない。どうすればいいかできる範囲で考え次につなげる。もとより獣、体で覚えることは得意。そんな意思是は伝播する。

「急がず、いつこずつこなしていこう」

アウラは元気良く声を出すと、魔獣を引き連れ開始地点に戻ってい

く。

マーレも魔法を使い戦鬪痕を消し去りながら後を追う。

そう、NPC達は戦えと行っていきなり動けるわけではない。それが傭兵AIや魔獣AIが弱いといわれる理由である。だが、もし正しい教育者、正しい戦略をもとに十分な育成期間を積んだなら……。

第四話

ナザリツク地下大墳墓のNPC達が、プレイヤーに知られること無くナザリツク襲撃イベントの準備を進めている中、ついに核心となる情報が、セバス・チャンよりもたらされた。

——ナザリツク襲撃のXデーは六日後の夜

もちろんセバス一人の情報ではない。一般メイドやプレアデスなど、複数で同じ情報を確認し裏付けとした上で、アルベドはナザリツクに所属する全NPCに通達した。

同時に想定される戦力。至高の御方々と同等以上の存在が五百以上。千に届く可能性もあることを包み隠さず、加えて苛烈とも言える命を発令した。

「戦闘員は、その能力と忠義を持って死になさい」

という命令も合わせて……。

非情とも取れる命令。

もしプレイヤー達がその命令を聞いたならば、眉をしかめ、苦言を呈するかもしれない。またはその意気や良しと、拍手喝采するかもしれない。

しかし、NPC達にとっては本望だった。

なぜならば、NPCは戦う力を与えられてから一度もその力を振るうことが許されていなかったからだ。さながら武器として作られた美しい刀が、一度も実践を経験することなく朽ち果てるに等しい。もちろん、それが幸せなことかどうかは平和主義者に言わせれば、戦わずに済んだのだから良かったと言うだろう。だが朽ちる刀に意思があればどうか。

「ああ、やつと本来の役目を果たせる」

それが、戦闘力を与えられたNPCがアルベドの指示を聞いて最初を感じた事だ。そこに善悪の記号は存在しない。あるのは純粋な闘争本能と忠義のみ。

もし、そこに心残りがあるとすれば

「私が倒れた後、ナザリツクは至高の御方々の敵を打ち破ることがで

きたか」

それだけだった。

「少しでも資金を稼ぎたいのに」

ペロロンチーノはナザリック地下大墳墓の表層、城壁の一番高い位置に陣取り、鷹の目のスキルを使い索敵をしながらボヤいた。

アインズ・ウール・ゴウンのギルド拠点の位置は、多くの敵対ギルドにバレている。正確には先日、ある情報屋ギルドを経由してバラした。

それを受けて、DMMORPGユグドラシルの大手交流サイトのユーザーイベント告知にナザリック襲撃イベントとして登録がされた。

しかし、先走って観光気分で仕掛けてくるもの。イベントに対する戦略的威力偵察を目論むもの。MPKをもくろんでいるのか、モンスターをトレインしてくるもの。いままで誰一人として来訪者がなかったナザリック地下大墳墓に、定期的に招かざる客が現れる様になった。

そんなわけで、ギルメン達は分担し、見張りを置くようになった。

もちろん社会人しかいないギルドのため、どうしても穴が開く時はあるが、それでもかなりの時間をカバーし見張りを行っている。

「まあ、いきなり戦端が開くなんてことがなければ、問題ないとはいえ暇だよな」

「(そういわないでくださいよ)」

物理的な監視をするペロロンチーノに対し、魔法的な監視をしていたモモンガが話しかける。

「(ごめんなさい。暇ですよね)」

「ですよね〜」

モモンガもあと二時間は不毛と思わしき監視行為をすることにゲンナリしながら言葉を続ける。

「実際、誰か来ても困るんですよ」

「(昨日来た新人パーティー。あれは後味悪かったですね)」

モモンガは昨日のことを思い出す。

昨日は式式炎雷が監視を担当していた時のこと、どうみても初心者風の装備をしたパーティがナザリックに侵入したというのだ。

モモンガも途中から合流り、対応したのだが第二層に到着するころには仲間がちりじりとなり、最後に残ったリースト系と思わしき女性キャラがブラックカプセルに飲み込まれて終わったのだった。

とりあえず、様子があまりにおかしすぎたので、集まったメンバーで協議し復活させたのだが、そこから雲行きが怪しくなったのだ。

まず襲撃メンバーは本当の意味で初心者ではじめて三週間もたっていないレベル。初期都市で親切な高レベル者に出会い、土日通してレベル上げを付き合ってもらったのだという。そして最後に、手ごろな中ボスがいるダンジョンとしてナザリックを教えてもらったのだという。

そう。

襲撃した新人プレイヤー達は騙されたのだ。

確認すれば、その支援してくれたという人のフレンド登録もすでに消えてることで、完全な確信犯だろう。あまりのいたたまれなさに、全員で必死に誤解を解き、ここで見たことはせめて一週間しゃべらない&できればログインしないでほしいとお願いした上で、ロストした装備やお金やらの代わりを持たせ、別世界の都市に解放することとなった。

ぷにつと萌えさん曰く、近場の都市で数名張り付き帰ってきたところを質問攻めにするだろうと、予想したのだが。さすがに人間種とはいえ、ユグドラシルにおいて新人が辞めていくのは心苦しかったのでこんな対応になった。

もつとも、その話をあとで聞いたるし★ふぁーは、

「いっぱしの外道にも五分の良心だね!」

といいことを言った風にどや顔してたので、みんなでどつき回した。

「(もうあんなことあってほしくくないですよね)」

「掲示板の一部では魔王在住みたいな書かれ方してるので、誤解する

善良な一般人が……」

「(せめてちやんと情報サイト見てから来てくださいよ!)」

モモンガが叫ぶが円卓の間では、数名のメイドが動き回っているだけ。とくに変化らしい変化はない。逆にモモンガはその姿をみて落ち着きはじめる。そう、いまここで暴れても意味はない。なにより警戒を怠って、最悪な形で低層の情報を抜かれれば、ナザリック全体の攻略難易度を下げることになるのだ。

「(ふう。あと少しの我慢)」

「ですね」

ペロロンチーノも同意する。

そう、ナザリック襲撃イベントはあと数日。もう目の前まで迫っているのだった。

第五話

ナザリック襲撃の当日

すでに襲撃予定時間まで二時間もない。

至高の御方々の内、大半はすでに円卓の間で待機されている。何名か、最後まで作業をされているようだが、予定時間には全員が集まられることだろう。

そして円卓の間には複数の監視パネルが設置され、各階層の状況が監視、記録されている。

そんな中、アルベドは玉座の間で一人いままで収集された情報を再確認した。もつとも確認する情報は端末などに管理しているようなものではなく、自分の脳内に蓄積した情報を再検討するという手法をとっており、その上で精度の高い分析ができるのだから、人ならざるものの能力といえるだろう。

さて分析する情報の基本は至高の御方々の言葉、端々に上がる単語を組み合わせ、一つの事象にまで昇華させる。

——目的

ナザリック地下大墳墓を一度戦場とし、その難攻不落を世界に知らしめること。その情報をもって、敵対者に安易に攻撃を仕掛けさせない抑止力となす。

理にかなっているようだが、同時に希望的観測な面も否めない。アルベドは考えている。

まず、至高の御方々のいう人間種は、それほどまでに優秀なのだろうか？ 私達を知るゴミ蟲のような存在であれば抑止力といわず殲滅を選択すべきだ。そうしないというは、それなりの理由があると見るべき。つまり人間種が至高の御方々と本当に同等以上の存在である可能性。その可能性は、たとえばシャルティアの戦力評価の話などからも垣間見える。

なにより不可解なのが、ナザリック地下大墳墓は弱点をさらけ出していることだ。万が一、億が一、その弱点を付かれることは、先程ま

での戦力評価など簡単に覆りかねないのだから。

もつとも、アリアドネという存在によって、その弱点が必須のものとなっているようだ。そのアリアドネこそを叩くべきではないかとアルベドは考える。同時に至高の御方々がそうしない理由はアリアドネこそ世界を定義する存在の一部だから、あえて戦いを挑まないのだとも推測している。これらについては情報の欠落が多い。

そしてその情報の欠落にこそ、至高の御方々の至高たる所以、深淵なる英知と戦略が存在するのでしょう。

——戦力評価と継続戦闘力

ナザリック地下大墳墓内の防衛機構の要は罨と考えている。罨は即座に復活させることができるほか、心理的な隙をつくつために遅延、ランダム、回数スキップに加えNPC達や召喚魔獣などと複雑に組み合わせによる連鎖発動。

復活が必要なNPCや一日の召喚制限がある魔獣などに比べれば、その効果は絶大だろう。

「私がなにも知らずに突入したとして、はたしてどこまで到達できることか……」

アルベドは右手をほほに当てながら、ため息をつく。

それほどまでに完璧な構造なのだ。なによりアルベドが財務状況を確認するとそこには膨大な金額が記録されている。先日の初心者と至高の御方々が評した襲撃者の攻略ペースと出費。

「毎日がんばって荒稼ぎさせてもらったかいがあったなあ」

「こちとら十二分に資金を蓄え、トラップのバージョンアップも行った今となつては……」

「ええ。二十倍の八百……いえ千のプレイヤーが同時に攻めてきたとしても余裕でしょう」

このアルベドはこの言葉を元にシミュレーションをする。

万全以上。

どの程度まで効果があるかは別として、少なく見積もっても三十九万七千とんで九十七回は全体を再建できる。たとえNPCが全滅したとしても、一万回以上余裕をもって罨を再建できるとアルベドは算

出した。

——気になる

モモンガ様とウルベルト様の会話

「中立ギルドの後押しは上手くいったと考えていいのかな」

「実際あんふうに話はされているけど、たぶん……」

「襲撃側も馬鹿じゃない。ある程度こちらの事情を把握した上で乗っけてくると考えていい」

「ウルベルトさん。それって、相手は罠とわかっていて攻撃してくるってことですか？ それだと損害とか」

「まず相手は自分以上に戦略眼がある存在としよう。この状況を見抜けないという保証は？」

「保証なんてありませんね。じゃあ相手のメリットは？」

「趣味嗜好によるが、るし☆ふあーのような愉快犯。相手の戦略以上の何かを準備することとで知恵比べを楽しむ戦略家。ただ大騒ぎしたいお祭り好き。最後に戦えるならなんでもいい戦闘狂」

「あゝ」

つまり、ナザリックの外にはナザリックという驚異を理解した上で、楽しむ存在が存外多いということだ。

異形種のカルマは、マイナスばかりだ。カルマのマイナスということとは、けして社会生活ができない存在ではない。むしろ、ニユートラルな存在が提唱する妙な秩序よりも単純で、力こそすべての存在だ。力とは、物理的な力のみを指すものではない。知恵、財、コネ、あらゆるものに及ぶ。ゆえにシンプルだが強固なシステムが生まれる。

その瞬間、アルベドの口元は大きくゆがむ。

それほどの存在がその磨き上げた英知と積み重ねた力をもってナザリックに挑んでくる。

力あるものが砕け散る姿。

至高の御方々が認めるほどの強者が膝をつく姿。

心躍る姿を想像する。そこには死力を尽くす至高の御方々の姿もある。中には力およばず倒れ伏す方もいるかもしれない。

「なんと素晴らしいことでしょう」

その言葉は誰もいない玉座の間に吸い込まれるように消えていく。それが何を指して言われた言葉かは、だれにもわからない。ただ、その時、監視網が最初の襲撃者の姿をとらえたのは運命だったのかもしれない。

第六話

ナザリツク地下大墳墓 表層

毒沼に囲まれ誰もが近付くことさえなかった場所。そこには神殿を中心とした古代都市があった。しかし建物は朽ち果て、そこにあったであろう人々の営みは風化し塵芥となつて消え去つていた。だが残った断片は、そこに生きたものたちの技術力の高さを感じさせるものばかりであった。

今日、ユーズーイイベントということで集まり、襲撃に参加したプレイヤー達は一様に驚いていた。なぜなら世界に一つずつしかない最大級のギルド拠点。それに匹敵するほどの広さと作り込みを持つ表層であつたからだ。

「見掛け倒し……だよな」

「じゃなかったら、あれか？　ここは世界トップのギルド拠点に近い規模つてことになるぞ？」

隊列というほどではないが、ある程度パーティーごとにまとまつて行動している。気心知れたメンバーで集まっているためか、若干緊張感に欠けており、そんなざわめきが聞こえてくる。敵感知の魔法を使えば、周りは敵だらけ。しかしその姿は見えない。

警戒しながら歩みを進める一行が、地下への入口となる神殿部分に近づいた時、空気が変わった。

ナザリツク表層の上空に、巨大な影が浮かび上がる。

影は次第に濃くなり、豪華な漆黒のローブに身を包んだりツチ、いやオーバーロードの姿を形作る。

「己が正義を信じて止まぬ者達よ。我ら異形種の楽園へようこそ」

上空に浮かぶオーバーロードは、ゆつくりとした仕草で歓待の礼を取る。

演出。

この場に集まったプレイヤーたちは、上空を見上げている。もちろん怨恨から参加を決めた者達は別だが、ある種のイベントとして参加したプレイヤー達にとって、モモンガのソレは、場を盛り上げる最良

のスパイスであった。

「卿ら、己の一生はすべて定められている」

艶と絶対強者という自負からくる覇気を兼ね備えた声が響き渡る。「勝者は勝者に。敗者は敗者に。そうなるべくして生まれ、どのような経緯を辿ろうとその結末へと帰結する。これが世界の定めである」ナザリックの表層にいる千人の襲撃者。ナザリック各層のNPC達。ナザリック九層の円卓の間にいるギルメン達。全ての者が今、高らかに謳うモモンガの声に聞き入っている。

「ならばどのような努力も、どのような怠惰も、祈りも罪も等しく意味は無い。今一片の罪咎ない者達が奪われ踏み躪られるのは、世の必然なのだから」

仕草、不穏なセリフ、そして演出はまるで勇者達の軍勢を待ち構える魔王そのものであった。

「愚かしく奪われ、踏み躪られる傲慢な敗北者たちよ」

いやがおうにも、襲撃に参加したプレイヤーたちの心の底から熱い何か湧き上がる。お前たちは敗北者であり、生まれ変わろうと変わりはしないと、常に蹂躪されるだけの存在であると目の前の魔王は言っているのだ。

このセリフに映画やドラマのワンシーンを想起し興奮する者。

罵倒され怒りを溜めるもの。

ゲームの中のことでありながら、リアルの現状にまで思いを呼び起こし、強烈な感情を湧き上がらせるもの。

——感じ方は様々。

しかし一様に言えるのはこれから何か起こる。そんな期待であった。

「ゆえに祝福しよう。我らの贄となれ。AMEN！」

魔王が両手を大きく広げマントがバサリと広がる。

広がったマントは空を覆いつくし、黒と赤でプレイヤー達を塗りつぶす。そして空に溶け込むように魔王の姿が消えると同時に、ナザリック表層のほぼ全域で地鳴りが発生する。

そう、低レベルではあるが、ありとあらゆるアンデッドが一斉に地

面から現れたのだ。

そしてプレイヤーが立っていた場所も例外ではない。足元から這い出し、足を掴むなど、まるでパニック映画のような状況になった。聡いものは、先ほどまでの敵感知の正体と認識し応戦をはじめ。なにしろ襲撃してきたプレイヤーの多くのレベルは百である。低レベルの物理攻撃無効を持つものも少なくない。今襲つて来ているアランダの群れは三十以下ばかり。即座とはいわないが、十分に余裕をもつて殲滅できるものだ。

しかしモモンガによる演説の後、虚をつくような突然の戦闘開始、加えて表層を埋め尽くすような数は、冷静さを失わせるには十分だった。

しかしレベル差はいかんともしがたいもの。時間経過と共に、相手が雑魚とわかると徐々に立て直し、最後の一体はそれこそ余裕をもつて殲滅するのだった。

だれもが達成感を得て次の第一階層に向かっていくが、一部の者は気がついていた。

貴重な回復アイテムやMPを少々とはいえ、雑魚相手に浪費してしまったことを。

ナザリック三層 地下聖堂

「二層と三層のトラップで350人はしとめたようです」

「そう。では配置について、忠義をつくすであります」

シャルティアは、武装を固め、地下聖堂の奥、砕けた聖女の像に腰を掛けながら、ヴァンパイアブライドからの報告を聞く。

ナザリック防衛戦開始から約一時間。

ナザリックの第一層から第三層はダンジョン型のフロアである。ユグドラシルにはフレンドリーファイアがないとはいえ、スペースの関係上同時に戦闘できる人数に制限があるフロアは、罠の効率は高い。その地の利を最大に活かした形で、第二層までで三百五十人のプレイヤーを無力化、または壊滅状態に追い込むことができた。

しかしシャルティアにとっては、どうでもよい報告であった。

なぜなら、トラップに引っかけた死ぬような愚か者に用はない。シャルティアが愛する創造主より与えられたのは、純然たる戦闘力。料理スキルやメイドスキルといった遊びのスキルは一切なく、眼前の敵を殲滅するための能力。

ゆえに待っている。

自分の背後にはヴァンパイアブライド達も武装を整え待機している。

そしてシャルティアの真祖としての能力が、聖堂の外、最後のデストラップに群がる愚か者たちをとらえる。

レベルにすれば至高の御方々と同等。しかしスキルの構成という点ではまたなんとも言えない存在たち。そんなもの達が一步、また一步と近付いているのだ。

「恐怖公より連絡。食いつくせぬほどの侵入者を確保と」

「なにが起きているかはあえて考えないようにしんしょう……」

シャルティアの守護階層のワンフロアを預かる恐怖公から、デスクラップに引つかかった大量のプレイヤーの状況報告がシャルティアの元にあがる。しかし、大量のゴキブリに侵入者が貪り食われる姿を想像し、思考から外したシャルティアは、恐怖公にフリーハンドを与えることにした。

その結果、恐怖公はその忠義を示すためフロアキャパシティ限界までの犠牲者を捕まえたただけここに残しておくでしょう。

現状、ナザリックにおいて罠などの消費ははげしいものの、あくまで想定内の範囲内。少なくともモモンガを含むナザリックのプレイヤー面々は考えていた。

——しかし。

「おい。表層にまた新しいプレイヤーがあらわれたぞ」

「どここのギルドだ？」

ナザリック表層を映すモニターに表示されたプレイヤーは、一人や

二人ではない。着々と増える影。完全武装したプレイヤーは、ナザリック周辺のモンスターなど目もくれず進撃してくる。

「二百は軽く超えてるな」

「まだまだ増えるぞ」

「先頭にいるやつら……セラフの連中だ。しかもガチ装備」

「右翼は魔法傭兵団か」

「鷹の団、薔薇、戦争ギルドまでかよ」

ギルメンが、外装の特徴や各種サーチの結果から所属を暴いていく。

その数は

「追加で五百。総勢千五百か」

侵入者の数をギルドマスター権限で見ていたモモンガが当初の予想を超える数字を口にするのだった。

そして、その情報は円卓の間に控えていたセバスから、即刻アルベド経由で全守護者……いや、全ナザリックに所属するものに通達されたのだった。

第七話

「襲撃者が千五百名に増加いたしました。いかがいたしましたでしょう」

セバス・チャンは至高の御方々が監視画面に集中する合間に円卓の間を出る。そして素早くメッセージを起動し守護者統括のアルベドに報告を上げる。

「おもしろいわ。至高の御方々の敵とやらがどこまでやれるか。見てみるとしましょう」

しかしアルベドは、笑みを浮かべながら受け答える。

——強者の余裕

——ナザリック、ひいては至高の御方々への信頼

アルベドの姿にセバスはそのようなものを感じ取る。ゆえに一言告げるにとどまる。

「承知いたしました」

セバスは満足し、本来の任務に戻っていく。対するアルベドは、素早く情報共有を行うと、まるで堰を切ったように笑い出す。なぜなら、増援も含め、どこまでもアルベドの予想通りだったのだから。そして答え合わせを楽しみにする子供のように、ゆつくりと言葉を紡ぐ。

「さあ、至高の御方々。貴方様方の力の真髄を私達下僕に見せてくださいまし」

ナザリック地下大墳墓 第三層

第一層、第二層に続き転移を中心とする各種罠とまるで狙いすましたように襲い来る低級アンデッドに、ナザリック襲撃イベント参加者の実に二割以上が犠牲になっていた。そして第三層も続くダンジョンに、参加者は辟易とした気分となっていたが、犠牲を出しながらも進むと、突然視界が開けた。

そこには、断崖絶壁と巨大な吊橋。そして橋に纏わりつくように低級アンデッドのヴァンパイアバットやゴーストがウロウロしている。

「なあ、アレ」

「絶対、板が抜け落ちて奈落の底だよな」

「昔のRPGみたいにそのまま第四層の入り口つてオチはないか？」

「そんな楽しいことを考える連中なら、ここまでに二割以上の犠牲なんて出ないだろ」

続々と迷宮区を出てきた襲撃参加プレイヤー達が、口々に感想をいう。まるで最初の犠牲者が出るのをまっているような口ぶりだ。いや正確には最初の挑戦者をまっけているのだが、結果は同じであった。

「よっしゃ！ 風雲〇け〇城所屬 島田D逝きますー！」

そう言うと、一人のシーフ風プレイヤーが名乗りを上げる。周りも歓声を上げながら場を盛り上げる。

そして最初のプレイヤーは複数の支援魔法を掛けつつ、クラウドチングスタートを決める。その加速はさすがレベル一〇〇プレイヤー。なかなかのものであつという間に吊り橋の三分の一に差し掛かる。

しかし、ここからが罠の本領発揮だった。

ヴァンパイアバットやレイスが攻撃こそしないが視界の邪魔になるように、一斉に纏わりつく。もちろん、レベル一〇〇プレイヤーにはたとえ走っている速度そのままあつたとしてもダメージにもならない。しかし視界が限定されている中、いきなり足元の橋板が抜けたのだ。

一つ目はその高い敏捷性でリカバリーし、次の板に足を掛ける。しかし、掛けた次の板がそのまま落下する。その時点で失敗を悟ったプレイヤーはフライの魔法を唱えるが、効果を発揮せず哀れ奈落の底に落ちていった。

だが、遊び半分に参加したプレイヤー達は拍手喝采を上げる。

そこからはまるでアトラクションに群がる一般客のように、次々と参加し奈落に落ちていく。しかし、落ちた橋板は戻らないため、しばらくすると残った橋板を連続ジャンプで飛び越えるアトラクションに早変わりしてしまった。

「なんと愚かな姿でありんしょう。こんな者たちが至高の御方々と同列などへドがでる」

もともと人間種に対し、食料としての価値しか認めていないシヤル

ティアが、馬鹿騒ぎするプレイヤーをみて最初に抱いた感想が侮蔑であつた。たしかにHPやMPを見る限り、至高の御方々に匹敵する存在ばかり。しかし、この兇行、こんな訳のわからぬ連中が、栄光あるナザリツクに土足で踏み込んだ。なにより愛する創造主に対して弓を引こうとしている。

「戦闘がはじまれば、声を出しての指示は無理。だから先に命令をつたえるでありんす」

シャルティアは控えるヴァンパイアブライド達に向き直る。

「最後の一人になるまで、敵を蹂躪せよ。命が尽きるまで」

ヴァンパイアブライドは一斉に礼を取り、命令を受託する。

その姿に満足したシャルティアは向き直り地下聖堂入り口をにらみつける。すでに扉の外には複数の気配がある。最初どのように仕掛けるべきか。何パターンか訓練している。どのパターンであつても、そのトリガーは全て一緒である。

「どうやら大きめのフロアか」

「襲撃に気をつけろよ」

「畏感知には反応ないが敵感知には反応あるな」

そんな会話をしながらプレイヤーは武器を構え、警戒しながら踏み込む。相手はすでに敵がいることを認識しているので、警戒を怠らずに一人、また一人と崩れ落ちた巨大な礼拝堂に入ってくる。

そして六人目が入った瞬間、強制的に扉が大きな音を立てて閉じる。

その無駄に大きく響くボタンという音に、プレイヤーたちは反射的に扉に視線を向ける。

「(今)」

シャルティアはそのタイミングで、羽ばたき最大加速を持ってプレイヤーに突撃する。シャルティアのメインウエポンはスポイトランス。名称の通り突撃槍の形状。加速からのチャージをしかけるのに最適な武器である。

敵がいることを知っていたプレイヤーも、扉の閉まる大きな音に虚をつかれた。そしてシャルティアの突撃に気がついた時にはすでに

目の前まで迫っており、盾役がカバーするよりも早く後方のプリーストにシャルティアのスポイトランスが突き刺さる。

「くそお」

後方に直接攻撃を仕掛けて来た敵に対して前衛担当のプレイヤーが斬りかかる。しかしシャルティアはひらりと飛び上がったと躲すと、再度チャージのために距離を取る。その行動をスキと判断したプレイヤーたちは一斉に遠距離魔法やスキルでシャルティアに追撃をしかける。もちろんシャルティアは多少の被弾を物ともせず加速する。

だが、このタイミングで盾役に各種属性攻撃が、まるで波状攻撃のように降り注ぐ。

盾役といえども、意識していない方向からの攻撃に対処することはできず、ほぼ全ての攻撃を受けてしまう。その中には弱点であった火属性も含まれていた。

「糞」

盾を落とすようなことはしない。しかし炎属性を受けた瞬間リアクションをしてしまう。その些細な行動の違いを攻撃をしたヴァンパイアブライドはもとより、飛び回るシャルティアも見逃しはしない。ヴァンパイアブライドは支援攻撃を一斉に火属性に切り替える。シャルティアは、盾役がロクに動けないことをいいことに後方への攻撃を続ける。

「こいつらどんだけ優秀なAI積んでるんだ」

「しかもレベル一〇〇NPC集団かよ」

実際にレベル一〇〇なのはシャルティアのみ。

背後で援護に徹するヴァンパイア・ブライドに至っては八〇前後。下は六〇代さえいる。

だが、遊び半分のプレイヤーとは勢いが違う。

存在意義の証明

いまこの瞬間に創造された喜びをかみしめるNPC達の気持ちはわからないプレイヤーたちは徐々に削られ、敗北を喫するのだった。

第八話

眼前の敵は幸いにも、目が曇っている。なら、刺し違えてでもペロロンチーノ様にあだなすものを一人でも多くコロスことができる。自分のHPはすでに四分の一もない。ゆえに最後の札を一気に切る。
〔エインヘリヤル死せる勇者の魂〕

声にならぬ声で叫ぶ、己が眼前、敵視界を遮るように分身を生み出し特攻させる。同時に自分の最後の枷を外し、血の狂乱に身を任せ。ペロロンチーノ様が美しいと言ってくださった姿は醜く変わり、白魚のような手足はやせ細り枯れ枝のような化け物のそれとなる。

「こいつヤツメウナギか！」

エインヘリヤルの猛攻の中、こちらを警戒していたプレイヤーが叫ぶ。しかし、すでに遅い。

警戒を忘れたプレイヤーにシャルティアは飛び掛かり、鎧ごと噛みつく。その罅は鎧を突き破り、相手の血を奪う。強引にでも振り払おうとするプレイヤーだが、いちど組み付かれたが最後、引き離すことはできない。周りの二人もシャルティアに攻撃を当て吹き飛ばさそうとするが、絶妙に邪魔をするエンヘリヤルに手を焼く。

「すでに、後がないならせめてこいつらだけでも！」

シャルティアの猛攻は、三人のプレイヤーが息絶えるまで続く。それと同時にHPゲージが0となり、シャルティアはまるで最初からそこにいなかったように掻き消えるのだった。

ナザリツク地下大墳墓 第五層 氷河 スノーボールアリス 大白球

スズメバチの巣をひっくり返したような形の構造物を中心に巨大な水晶が立ち並ぶ。氷河フロアの中でも数少ない構造物であり、一目立つ巨大な人工物である。

その入り口の前でコキュートスは武器を氷雪の上に刺し、敵がここに押し寄せてくるのを待っていた。

守護者として、プレイヤーにはデバフとダメージ、そして視界不良

を与える吹雪の中、フロストウルフやフロスト・フラウが襲い掛かるように指示をだしている。そもそも魔獣を操る同僚と違い、自分は戦術を考えることはできるが、随時指揮をとるスキルは持ち合わせていない。

ゆえに、随時指示が必要ないよう部下たちを鍛え上げ、敵へのヒット&アウェイを徹底させた。そして狙うはただ一つ、突出する敵を集中して叩け。それを守ったモンスターたちは今、吹雪や雪原に隠れ、プレイヤー達を一人一人確実に削りコロしていた。

「敵が侵入して三〇分。そろそろかの」
「ワカッタ」

フロスト・フラウの言葉を受け、コキュートスは立ち上がり武器を取る。

コキュートスには広域感知系スキルも魔法もない。しかし、魔法的な感覚でも、先鋭化した己が五感でもない感覚で、敵が近付いてくることを捉えていた。

「シャルティアアヤ、ガルガンチュアノヨウニ、一体デモ多クノ敵ヲ殲滅セヨ」
「はっ」

周りに控えたフロストフラウ達はコキュートスの命令を受け深く礼をする。

コキュートスは一回だけ振り返る。大白球には次の層につづくゲートはない。正しいゲートはこの反対側、氷山の中腹の麓にある小さなあばら家。

いわば囿。

しかしコキュートスは疑問を持たない。むしろ、ここでコキュートスが善戦すればするほど、敵はここに本当のゲートがあると考ええる。

「セイゼイ華麗ナ囿トシテ、散ツテ見セヨウゾ」

第九話

コキュートスは、上腕には炎属性のハルバートと風・雷属性の刀。下腕には神聖属性の小太刀と、闇・死霊属性のマインゴーシュを持ち、ゆっくりと構えを取る。周りではフロスト・フラウが十体にフロスト・ウルフが十八体展開を始める。

こちらの展開が終わる頃、ブリザードの向こう側で建物を捕捉した侵入者達をコキュートスの感覚器官が捉える。

「私ノ初撃ニ合ワセヨ。後ハ各自ノ判断デ殲滅セヨ」

コキュートスは短く指示を出す。

よく見れば侵入者たちは、敵感知でこのあたりにエネミーがいることを認識しているようだが、ブリザードのため視界が確保できず、コキュートスの背後にある巨大な建物を目指して動いてきたようだ。

「構造物の近くにエネミーの反応だ。警戒しろ！」

「お？ ガーディアンがいるってことは、次の階層への入り口で当たりか？」

斥候役らしきプレイヤーが警戒の声を上げるも、続く軽戦士らしき男が軽口を叩く。もちろん軽戦士が悪いわけではない。視界がきかない中、黙々と移動することは精神的にも疲れる。さらに常に周りにはエネミーの反応があり、スキを見せればブリザードに乗じて襲撃され続けているのだ。すでに疲れるを通して苦痛の領域に踏み込んでいく。だからこそ、気分を少しでも和らげるために、軽戦士は軽口を叩いたのだ。

しかし、間が悪かった。

軽戦士が喋り、斥候が意識を後方の仲間に向けた瞬間。

斥候は不意打ちで四連撃を受けてしまった。

「なっ」

もちろん、襲撃されるのは慣れている。斥候はまず相手を視認し、把握することに務めた。

・敵感知で先程まで結構な距離があったが、それを一瞬で詰めるス

キルを持った存在

- ・ 鎧などは見当たらず見るからに昆虫系外骨格。 蟲王と予想。
- ・ 四本の腕にはそれぞれ違う武器を持っている。 たぶん先程の瞬間四連撃はコレ

・ 問題は自分の弱点属性である炎攻撃が含まれている

「こいつ複数属性の四連撃を使うぞ。 しかも距離を詰めるスキル持ちだ」

斥候は素早くショートソードを抜きながら叫ぶ。 しかし、後方からの返事は了解の声ではなく、別の叫び声だった。

「ウルフ五。 いや七」

「遠距離魔法。 四」

眼の前の蟲王の攻撃と同時に、フロストウルフと遠距離攻撃ができる敵が一斉攻撃をはじめたということがわかった。 同時にパーティのリーダーから指示が飛ぶ。

「軽戦士と斥候は二人でそのデカブツを抑えろ。 おれはウルフを狙う。 銃士は援護、魔術組は支援」

「こつちだ、デカブツ！」

指示に合わせてパーティが動き出す。 軽戦士は避けタンクとしての挑発などヘイト管理系スキルを発動する。 それに釣られるようにコキュートスも、軽戦士に向かって、上腕の武器を使い二連撃を打ち込む。

もちろん軽戦士はそのスキルを十全に発動し、コキュートスの攻撃を素早く左側に回り込みながら躲す。 そしてコキュートスのがら空きの左脇に向けて、無属性だが耐性突破と刺突ダメージ向上に特化したエストックを突き立てる。 さらにその動きに合わせて斥候は右側に回り込み、右腰に向けてショートソードを突き立てる。 いわば疑似二連撃。 この二人がパーティを組むようになって、定番となった初撃のパターンである。

しかし攻撃が通ると考え、いつも通り次の攻撃につなげるためのスキルを準備していた二人は、ありえないものを目にする事になる。なんとコキュートスはエストックとショートソードの突きという、

受けにくい事この上ない攻撃を、まるでなんでもないもののように、下腕の武器で受け止めたのだ。それこそ、武器の角度がわずかでもずれば、武器は滑り、狙った位置ではないとはいえ刺突を受けてしまう攻撃を、寸分の狂いも無く防御してみせたのだ。

しかも、コキュートスの動きはそこで止まらない。

先程左右の上段から振り下ろした上腕の武器を、その異形の腕力でたやすく引き戻し、左右にいる相手に対して下段からの斬撃につなげたのだ。

侵入者の二人は、次の攻撃に行くための準備をしていたため、不意打ちとなった攻撃を避けること無く受けてしまい、大きく弾き飛ばされる。

たしかに蟲王の視界は通常より広く左右であっても、正確には背後であつても知覚できる。そしてその腕の可動域は人間のそれ以上の広さを持つ。そんな存在が十全に四本の武器を振り回すのだ。

「おいおい。こいつとんだけ高度なAI積んでやがるんだ」

軽戦士が素早く体制を立て直しながら愚痴る。

なにより、先程の攻撃のあと、まるで狙いすましたようにコキュートスは吹き飛んだ斥候の脇に移動し、立ち上がる前に背中からハルバートと刀で切りつけ、その質量でまるでバウンドするように浮いた体に、下腕の小太刀とマイニングシユが最短距離で突き刺さる。

「アンカーハウル」

軽戦士がヘイト上げのスキルを立ち上げると、再度正面から攻撃を繰り返す。

普通であれば、これでコキュートスのヘイトは軽戦士に向く。

いや、コキュートスもしっかり軽戦士に意識を向けていた。だが、次の行動はプレイヤー達には予想できないものであった。

「えっ」

コキュートスは軽戦士に対し、先程まで攻撃を加えていた斥候をまるでボールのように蹴り上げ、ぶつけてきたのだ。もちろんフレンドリーファイアが無いユグドラシルである。蹴りダメージを食らった斥候はいざしらず、飛んできた斥候の体にぶつかっても軽戦士にダ

メージがはいることはない。

しかし軽戦士は何を思ったのか、不意に飛んできた味方を受け止めるような動きをしてしまった。

これはフルダイブ型のゲームではよく見られる行動である。たとえゲームとわかっていてもとっさの動きはリアルのものに近いものとなってしまう。たとえば、友人が飛んでくれば、受け止めようとするか、躲そうとするかの二択である。

そして軽戦士は斥候を受け止めた。

ダメージも入らなければ、体勢を崩すこともない。しかし、つい受け止めるために、手にした武器は落とし、なによる受け止めた相手は中途半端な姿勢となっていた。

それが悪かった。

縮地で距離を詰めたコキユートスは、十分に狙いすまし軽戦士の首にハルバートと刀を叩き込む。急所攻撃を受けた軽戦士は大きくのけぞり、後ろにたたらを踏みそうになるが突然腰から下の動きがとまる。

——影縫い／修羅

コキユートスは狙いすましたように、影縫いのスキルで軽戦士の足を拘束。姿勢が崩れ、斥候を支えきれず落としてしまった軽戦士のがら空きの左脇の下に小太刀を、右脇腹にマインゴーシユを修羅で攻撃力をUPさせて突き立てたのだった。

この時初めて軽戦士は自分がどれほどの敵に相対したのか理解した。

普通レベル一〇〇にもなれば、通常攻撃を十回以上を受けても死にはしない。

しかしプレイヤー VS プレイヤーの場合はその限りではない。急所攻撃。鎧の隙間、種族の弱点、武器の種類。様々に設定された条件をかいくぐり打ち込む至高の一撃。その場合、数発受けただけでHP全損するダメージとなることもある。

気が付けば軽戦士のHPバーはレッドゾーンに突入していた。通常のNPCと侮って数発受けてもたかが知れているとみなし、HP管

理をおろそかにしていた。

結果がこれである。

そして、軽戦士の視界に最後に映ったものは、コキユートスが刀を大きく振りかぶる姿であった。

第十話

ナザリツク地下大墳墓 第七層

煉獄の炎に包まれたフィールドの奥。ゴシック様式の荘厳な館の一室で、一体のアーチデビルが各所からの報告をまとめていた。上質だがどこか道化めいたオレンジ色のスーツを着込み、メガネでその宝石の瞳を隠す悪魔、デミウルゴスである。

「第一層から第二層までで二五一名。第三層はシャルティアの献身もあり二八二名。第四層はガルガンチュアの爆死に巻き込むことで一二八名。第五層は初となる環境ダメージと階層の戦力の奇襲とコキュートス自らの囷によって二七〇名。第六層はたち・みー様が敵主力三九名を引き抜き一騎打ちに持ち込み、アウラ達のゲリラ戦で一二六名。ここまでで一〇九六名ですか」

デミウルゴスは、立ち上がると窓の外に視線を送る。

侵入者がこのフロアに突入してから、それなりの時間が経過しているが未だにこの館に近づいてくる気配はない。

「どう思うかね？ アルベド」

「（直接ではないにしろ、間接的に階層間ゲートの位置を割り出すスキル保有者がいる可能性が高いわね。でも、デミウルゴスも気が付いていた事ではないのかしら？）」

「なに。ウルベルト様もおっしゃっていたが、共通認識というのは大事なものだとは私は考えているのだよ」

デミウルゴスは、窓際に立ちながらメッセージでアルベドと会話する。

デミウルゴスは各所から挙げられる報告から、侵入者の動きというもの进行分析していた。特に着目したのは、戦闘が発生した場所と時間。そして被害状況である。

第五層における親友とも言えるコキュートスの身を呈した囷は一定以上の効果があったと評価している。対して第六層のアウラとマールが守護するジャングル地帯だが、最終的には至高の御方の作戦で追撃があったとはいえ、層での死亡者数が一気に減ったのだ。なに

より他の層より短時間で次の層へのゲートが発見されている。

——運良くゲートが見つかった

楽観的な者や考えない者はそのように捉えるだろう。

しかしデミウルゴスは偶然という思考停止的解釈を許容しない。もし偶然があるのなら、自分が把握できていない要素による必然が突然結果として現れたに過ぎないのだから。ゆえに第六層を被害を最小限に、早期突破したことを偶然と捉えず、何らかのスキルないし魔法が原因であると判断した。加えて、第七層に入ってから無駄は多いながらも、ゲートに近づいている侵入者たちは、見た目や罠の数などに騙されていないことは明白であった。

「(では、防衛時における指揮官であるデミウルゴスは、どのように対処するのかしら)」

「私が三魔将を率いて、対象候補となる侵入者を殲滅しましょう。私にはあなた達のように特化した戦闘能力をいただいておりません。しかし」

「(そうね。貴方の智謀を支える多彩なスキルや魔法は、私達の上を行くわね)」

「故に、隠れた能力者を暴き出すのは最適でしょう」

そういうと、ゆっくりと窓際から離れ、廊下へと続く扉を開ける。そこには、すでに事情を察していたのだろう、三魔将が武装を整え、直立不動の姿で待機していた。

デミウルゴスは満足そうに一っうなずくと、館の出入り口に向かって颯爽と歩き出す。そして三魔将も付き従う。

「(あら、貴方に倒れられては困ってしまうわ)」

アルベドはまるでおどけたような感想を言う。もちろんデミウルゴスもアルベドの言葉を額面通りに受け取ることはない。

「ゲート前の紅蓮と私達で挟撃すれば、目標を暴き出し殺し尽くした上で二〇〇は削ることができます。残るは目と耳を失った烏合の衆、八層の荒野を迷いヴィクティムの罠にかかれればそれこそ終わりでしょう」

そう。

デミウルゴスの中では、すでにこの戦いは終焉に向かつて収束しているのだ。いわば、自分はその収束を決定づける一手を討つ。その後たとえ滅ぼされようとも、ナザリツクは勝ち残る。たとえアルベドがどのような考えていても、次の層で侵入者は死ぬ運命にある。

「(あら、私達とて第八層の情報は、ほとんど開示されていないわ。それではあなたの嫌いな偶然を期待することになるのではなくって?)」

そもそも第八層の守護者ヴィクティムは基本動き回らない。メッセージでやり取りしたことはあるが、所属NPCの少なさからNPC達にとつては八層は謎のフロアともいえたのだ。アルベドはわざとらしくその事実をデミウルゴスに告げる。

「愚問だよアルベド」

デミウルゴスはそう言いながら館の扉を開け放つ。

そこには灼熱の業火が、大地を焼き尽くす世界が広がっており、その熱はデミウルゴスの頬を撫でる。

「創造主主を信じなさい。至高の御方々は六層の援軍でその実力の片鱗をお見せ下さった。ならば、問題はないのだよ」

そういうとデミウルゴスは、移動を開始する。

アルベドは玉座の間で返されることがなくなったメッセージを思い出しながら、最後とばかりに言葉を紡ぐ。

「それが貴方の評価なのね」

第十一話

第二章 最終話

ナザリック地下大墳墓 第八層

「さすがは人類種代表諸君の実力。称賛に値する」

アインズ・ウール・ゴウンのギルドマスター モモンガが、パチパチと手をたたきながら荒野をさまよう侵入者達の前に現れた。ギルドメンバー達を引き連れるその姿はまさしく魔王そのものであった。

第一層と同様に何かの罠の可能性を考える侵入者達。警戒を顕にし、状況把握に勤める。

敵感知など無意味だ。紛れもなく目の前に大量の敵がいる。さらに包囲するように四方八方に敵の反応ばかり。生命感知などで少しでもアインズ・ウール・ゴウンメンバーの情報を抜こうとするも、しっかり対策されているのだろう。すくなくとも一・二個の魔法やスキルではろくに看破することができなかった。

「故に苦痛無き死をあたえよう」

そんな侵入者を横目に、最初に動いたのはモモンガの脇に立っていたバードマンであった。しかし、彼のメインウエポンは弓と知られているが、今回は手に持った何かを無造作に投げつけてたのだった。

先頭にいたプレイヤーは、投げつけられたのが何かわからなかったが防御系スキルを発動。目にしたのは攻撃魔法でも攻撃アイテムでもなんでもなく、ある意味気味の悪い枯れ木のような翼を持つ異形の胎児……のようなものであった。

「みずあさぎくわぞめみずあさぎくわぞめ あおみどり、

ひとときわちやぞうげひもえぎ

きみどりもえぎぞうげくりひとはくじときわぞうげくわぞめ

くりみずあさぎあかね、 くりこげちやしろねりだいでいときわ

ぼたんあおむらさきうのはな

ねりくり

しんしゃだいでいきみどりしんしゃ

やまぶきしろねりしんしゃ」

モンスター的一种なのだろうか。その造形の出来の良さが生理的

な嫌悪感を呼び起こし、防御したプレイヤーは手に持った武器を一閃する。切り裂かれた胎児には手応えらしい手応えはなかった。ほどなくして消え去るだろうと、攻撃したプレイヤーもそう思った矢先、そのモンスターは奇っ怪な叫び声を上げながら朽ち果てる。

その言葉を聞き分けることができたものはいない。何かを言ったのは理解できるが、何と言ったかは理解できない。既存の言語体系に沿わないその叫びは、ただただ不気味な断末魔となって響き渡る。

だが、次に続いたのはプレイヤーたちの悲鳴であった。

「なんだったんだ」

「おい足が!!」

——それは原始的な呪い。死と引き換えに敵に牙を向く足止めの呪い。

プレイヤー達は己のステータスをすばやく確認する。そこには呪いによる移動阻害60秒と表示されていた。しかも行動阻害対策などをしているにもかかわらずにだ。どんな方法で実現したかはわからない。しかし、先程のNPCらしきモンスターを殺したのがトリガーであろうことは理解できた。

移動ができないだけで、防御やスキルの使用は可能なようだ。それこそタイム・ストップからの即死コンボが撃ち込まれようとも対応できる。

だが、現実は違った。

「The goal of all life is death」

プレイヤー達はモモングの背後に巨大な時計が出現するのを確認する。しかしあまり見かけないエフェクトで、どんな効果かを特定することはできなかった。

しかし続く魔法は有名だった。

「クライ・オブ・ザ・バンシー」

死霊系高位魔法。即死対策が無ければ、ひとたまりもない魔法。しかしこの場にいるメンバーは即死対策など当たり前のようにしている。

聞き慣れぬスキルの発動に加え死霊系の即死魔法。普通なら無視

していただろうが、つい気になり自分のステータスを横目に確認すると、予想だにできなかったことが発生していた。ほぼ満タんだったHPゲージそのものがゆっくりと崩壊していくのだ。

この演出。

耐性不足の属性で、スリップダメージを受けた時に発生する属性やられ系のエフェクト。放置すればHP全損による死亡が待っている。そんな演出に似ていた。

このことにピンときたプレイヤーが、とつさに回復アイテムや状態異常アイテムを使用する。

「回復アイテムがきかねえ」

「状態異常アイテムもだ」

逃げ出し距離をとることもできない。HPも腐れ落ちるように徐々に消えてゆく。

「蘇生アイテムなら」

ステイタス・ボルネイア

「させぬよ。■■■■ オブ モモンガ 超過駆動」

モモンガの声と同時に、体の中心にある赤い宝玉が閃光を放つ。

「アイテムが使えないぞ」

「ちっ、武器が外された」

「ワールドアイテム……だ……とう」

動けず、効果時間内はアイテムが使えない。装備していた武器も解除され、再装備しないといけない。加えてもともとナザリックの中は全域転移障害が組み込まれている。そして理解不明なHP崩壊現象。

六十秒。されど六十秒。

迫りくる全滅の足音に、襲撃に参加したプレイヤーは恐怖する。メッセージには絶望に打ちひしがれた叫びが聞こえる。

「全滅だ……と……」

一五〇〇人のプレイヤー撃退という、ある意味の偉業が達成されるからしばらく、興奮冷めやらぬアインズ・ウール・ゴウンのメンバー

らはそれぞれを称賛し、また肩を組み勝どきを上げ、喜びを表現していた。

とはいえ一時間も経てば、ある程度冷静にもなる。いくら多くの者は明日休日とはいえ、いい時間なのだ。襲撃されてからは緊張の連続であり、一通り興奮も冷めれば、緊張も解け一気に疲れもでてくる。「じゃあ、皆さん最低限防衛網を復活させたら、ぼちぼち休みましょうか」

「あ、動画用のデータは終わったら外部掲示板に乗つけたアップローダーにパス付きであげてくださ〜い」

「じゃあ、罨の再起動と魔獣の再召喚は始めるぞ〜」

おのおのが担当する作業をはじめ。そんな中、ペロロンチーノは姉であるぶくぶく茶釜に声をかける。

「おつかれ」

「おつかれさま」

おのおの労をねぎらうと、おもむろにペロロンチーノはつぶやく。「シャルティアのAI。ベースはへろへろさんとかが作ってくれたけど、それでも自分なりに結構手を入れたつもりなんだ」

「ぶ〜ん」

二人は話しながらNPC復活の手続きを始める。とはいっても、実質数回ボタンを押すだけで、ギルド口座の残高が減り、二人の目の前に復活エフェクトが走る。

「おれの作った以上の動きで戦って……って感じたんだ。建さんも似たようなことを言ってた」

「ごめん。アウラとマールレの戦いは円形劇場に行っちゃってたから、まだ見てないのよ」

ぶくぶく茶釜は、第六層襲撃時の際、たちち・みーと二人で円形劇場に敵主力の一部を呼び込み、分断するという作戦を実行していた。そのためペロロンチーノの疑問に答えることができなかった。

「実際、メタなことをいえばAIだってベースとなる戦闘AIがあつてある程度組んだ戦術にそって行動を選択。それが良い乱数を引いて良い結果が出たって可能性もあるのよね」

「ある……でも」

「でも?」

気がつけば二人の目の前には、先程まで奮戦し、あえなく散ったNPCが復活していた。

「攻撃パターン自体はたしかに組んだものばかりだったけど、その選択タイミングは絶妙だった。姉ちゃんの言うように乱数の結果の可能性もあると思う。でも俺にはシャルティアの執念みたいなものを感じたんだ」

「そう」

復活したアウラとマールを見て、ぶくぶく茶釜は二人を軽く抱きしめる。

「案外意思があってもいいかもね」

ペロロンチーノも姉にならない、よくがんばったねと呟きながらシャルティアを抱きしめる。そんな弟の行動を横目にみながら、残酷な事実を口にする。

「でもシャルティアに意思があつたら、愚弟、あんた今頃BAN祭りね」

「ちょw」

「又は事案w」

「まあ、そうなんだけどさ」

そんな軽口を叩く姉弟の姿を、三人のNPCたちは何も言わず、静かに記憶に焼き付けるのだった。

第三章 フォールン・エンパイア 第一話

ここからは第三章 3・4話程度ですが、少々辛目のお話が続きます。

ナザリツク地下大墳墓 第二層 玄室奥 プライベート空間

そこは決して広い作りではない。廊下を照らす光は歩くのに不便しない程度抑えられ、どこか甘い香りとうつつすらとした煙が漂う空間。耐性の無いモノが、ここに踏み入れれば魅了にはじまり、数多のバッドステータスを受けることになる。そんな危険地帯の奥にある一室。香りと煙が一層濃い空間にそれらはいた。

四人。

一人は真祖の吸血鬼。残りはヴァンパイアブライド。

いかがわしい何かをしているわけではない。真祖の吸血鬼であるシャルティア・ブラッドフォールンが、王侯貴族が使うような本革張りのソファアの上で、柔らかく手触りの良さそうなクッションに埋もれるように横になっている。そして侍るヴァンパイアブライドは、大きめの扇を振りそよ風をおこし、一人は香炉を胸元で持ち、香りと煙で空間を演出する。最後の一人は、シャルティアの足元に侍り、爪の手入れをしている。それだけのモーシヨンである。

ただ吸血鬼の少女がリラックスし、侍女に爪の手入れをさせている。そんな絵面なのだが、シャルティアを含むまわりの者たちの表情、仕草がどこか退廃的な空気が醸し出し、この後何が起こるのか下世話なモノなら想像せずにはいられない雰囲気があるのだ。

これもペロロンチーノの力作といえはその通りなのだが……。

ここまで破壊力がある姿を、当のペロロンチーノは見えていない。

「ふう」

シャルティアは、まさしく退屈仕切った表情でため息を漏らす。周りのヴァンパイアブライド達も表情にこそ出さないが、心を同じくするところである。

理由は単純。ペロロンチーノの不在である。

もともとは毎日シャルティアの元に会いに来てくれた。

しかしナザリック襲撃イベントが一つの契機だったのだろうか、少しずつだが、まるで枯れ木の葉が一枚一枚落ちていくように、至高の御方々の足が遠のいていったのだ。そしてリアルで二年立つ頃には、その半数が数ヶ月ログインしていないという状況だった。

そして、ログインが減った中にペロロンチーノも含まれていた。

もちろん、まだ週に一日程度、ペロロンチーノ様曰くりアルの休日ごとに会いに来てくださる。だが、もともとは毎日。それが一日と間が空き、一日となり、今は七日である。その後を想像するだけで、シャルティアは憂鬱となり、決められた巡回などこなすと、日がな一日ここにこもるようになったのだ。

それもあくまで、ペロロンチーノが会いに来る際、まずここに来るからという理由にすぎない。

もちろん、NPCとして割り振られた仕事、プレイヤー達は認識していないが、守護階層のポップモンスターの管理や整備などは怠ったりはしない。万全に、抜け目なく、あの時のことが起こってもいいように万全を期している。そして小規模ではあるが、まるで腕試しをするようなパーティーが襲撃してくることもある。が、あの時のような組織だったのものではなく、シャルティアを突破し第四層に踏み入れたものは一人たりともいない。

あの時のように誉めてもらいたい。

たったそれだけの事のために、いまもシャルティアは……いや、ナザリックの全NPC達は行動をしている。しかし、先日ある話が流れてきた。

「ホワイトブリム様がもうこちらの世界に来れないと言っておられたとか」

シャルティアはポツリと漏らし、侍るヴァンパイアブライド達も静かに頷く。

もちろんホワイトブリムと直接つながりを持たないシャルティア達だが、直接の創造主とは一線を画すが至高の御方々という風に敬愛

していることに変わりはない。

話題のホワイトブリムは、リアルでの連載漫画が軌道に乗っただけでなく、アニメ化などメディアミックスを含め今人生で一番力を入れないといけない時期に差し掛かっていた。そして愛着はあるが、自分の人生と夢を天秤にかけ、しばらく仕事に専念することを選択したのだった。そしてその決意をギルメンに伝え、それでも愛情の証として、自分の担当したメイド達に数点のサブデザインの服（もちろんメイド服）をそれぞれに与え、名前と簡単なプロフィールを贈ったのだった。

もちろんメイドたちは笑顔でホワイトブリムを送り出した。

たとえ、影で涙したとしても創造主の決意を無碍にできないと感じたからだ。

しかし彼女たちはまだ幸運である。

別れがあったのだから。

中には、何も言わず去ったとおもわれる至高の存在もいる。

もちろんプレイヤー間でメールやメッセージで別れを告げるものがほとんどであるが、全員がNPC達の前で別れを告げたかといえばNOである。なにより、最後の別れの場合は、荷物の受け渡しもあり、無人の宝物庫である場合がおおいのだから。

しかしNPC達には伝わらない。

いつか自分たちが創造主に捨てられるのではないか……。

そんな恐怖が憂鬱となって、いまのナザリックを覆っているのだ。

第二話

一五〇〇人襲撃事件から三年。

シズ・デルタは、今日もナザリック地下大墳墓を歩いて回る。

実際は二・三日に分けてだが、理由はその膨大な罫やトラップの確認である。記録されている情報と内容に齟齬がないか。現在、起動モードになっているのかそうでないか。破損などで放置されていないか。

これはシズが創造主より与えられた重要な任務であり、唯一シズにだけ与えられた仕事である。たとえばプレアデス達も代行できない。たとえ守護者やその上の統括であってもだ。

だから、シズは今日もナザリックを歩き回り、自分の仕事を全うする。それが「戦い守ること」と並んで与えられたシズの存在理由であるのだから。

ナザリック地下大墳墓 第九層

シズは今日も任務を終え、待機場所でもある第九層にもどってくる。ここからは、九層を適当にまわること。そして一定時間まわったら充電のために自室に戻ることに。そんなことを考えながら、足に向けた。

「ああ、シズ。こんにちは今日の日課はおわったのかしら？」

シズは声をかけられた方に目を向ける。

そこには同じプレアデスのソリュシヤン・イプシロンが立っていた。

「うん。おわった」

「そう。どう？ いっしょに食事でも」

「わかった」

プレアデス同士は種族こそ違うが、姉妹としてそれぞれの創造主に生み出された。だからというわけではないが、姉妹間の仲は良好である。

しかし他の姉妹と違い、今現在この二人には別の意味で共通項が

あつた。

それは……創造主が何も言わずすでに一年以上現れないこと。

ほかの姉妹の創造主で言えばユリ・アルファの創造主やまいこは、ユリに最後の別れをしておりサブウェポンを贈っており、理由も「受験をするクラスの担任になった。先生として精いっぱいサポートしたいから」といつていたらしい。受験をするクラスというのはよくわからないが、先生、つまり教え導く立場でより困難な地位となり責任を全うするために、この世界に來れない。そうユリは理解した。もちろん置いていかないでほしいとわがままを言いたくもなったが、慕う妹達を置いてはいけなさと見送つたという。

またほかの姉妹も別れをちゃんと済ませたか、今も定期的に会いに來られるもの。

しかし、シズとソリユシヤンは、ともに創造主と一年以上会っていない。

もちろん一般メイド達や姉のユリのような別れもない。

気が付けば一日二日、一か月、一年と経過してしまつたのだ。

もちろんプレイヤーとして、ギルメンやモモンガへの挨拶もされている。すでに、資産のほとんどは宝物庫におさめられ、再会の日を待っている。

しかしNPC達にそんなことなどわからない。

「私達は捨てられたと思う?」

「……わからない」

食堂に向かう途中、ソリユシヤンはおもむろに質問をする。現状、この質問はナザリツクNPCの中ではタブーである。しかし、唯一同じ境遇のシズになると、胸の内を聞く。

「統計的にもう会えない」

そう。

週一ぐらいのプレイヤーが、なにかのイベントをキツカケにアクトがあがることもある。すくなくとも、至高の御方々で、三名ほどそんな方もいた。しかし数か月間空け復活された方はいないことをシズはしっているからだ。

「会えないという事実には理由が必要かしら？」

もちろんソリュシャンも、もう会えるとは思っていない。そこに悲しいや寂しいという感情はあった。それはもう過去のことだ。しかし、ちゃんと別れを言われたモノ達とそうでないものの差というものの差とは何か？ その一点だけは今も知りたいとおもっている。

もし、その差がわからなければ、目の前のかわいい妹を捨てた創造主の行動に「なぜ」と言ってしまう、シズを困らせてしまうからだ。自分は乗り越えられた。残ったのはたとえ残虐嗜好という感情であったとしても、感情というものを整理できた。

「会えない事実があるだけ。そこに理由付けするのは、いつも残されたもの」

「あら、ずいぶんと詩的な表現ね」

「最近図書館で本も読む」

そういうシズを、ソリュシャンは後ろから抱きしめる。

「ソリュシャン。歩けない」

シズはソリュシャンに抗議するが、無理に抜け出そうとはしない。そんなシズの行動に、ソリュシャンは思う。

この感情というものに疎い妹が、いつしか去った創造主のことで悩まぬように。せめて、悩んだ時に少しでも手を差し伸べてやれるように、自分は近くにしよう。

そんな時、食堂の方からある声が漏れ聞こえてきた。

「モモンガ様が新たな守護者を生み出されたそうよ」

その言葉はNPC達の中にまるで湖面の波紋のように広がっていくのだった。

第三話

一五〇〇襲撃事件から三年。

モモンガ、いや鈴木悟はふと時間の流れを感じて思い返す。

仕事は相変わらず忙しかった。でも、生きがいとすら言える趣味、ユグドラシルのおかげでリアルの煩わしさの中、なんとか頑張ろうというモチベーションを維持することができた。それ自体は決して悪いことではない。薄給で長時間労働ではあるが比較的安全で安定した仕事。このご時世、学の無い自分の経歴を鑑みて、底辺でありながらリスクを減らすことができるのだから悪くはない。

しかし、最近ではリアルよりも趣味のほうが問題を抱えるようになった。

ーユグドラシルの過疎化

もちろんゲーム人口の移り変わりは当たり前のことで、新技術、新アイデア、新テイストを組み込んだ新作が発売されれば、ユーザーはそちらに流れる。作品の魅力がどれほどあろうとも、移り変わりと

いうものがある。

ユグドラシルの過疎化。ユーザーの総数は減り、新規ユーザーもごく少数となっていた。公式イベントも昔ほどの人が集まらず盛り上がりには欠け、毎週・毎月のように行われていたユーザーイベントもほとんど無くなった。なによりガチ勢といわれ、規模を誇った強力なギルドがどんどん解体、または規模を縮小している。

そして過疎化はモモンガのギルド、アインズ・ウール・ゴウンにおいても例外ではなかった。一時期四十一名いたメンバーも、今では半数を割り込んでいる。さらに、いわゆるアクティブと言われる高密度でログインするプレイヤーは十人にも満たない。

いまだに保有されるワールドアイテムの数々や、最盛期に勝るとも劣らぬ堅牢なギルドの防衛網のため、Wikiや攻略サイトでは伝説のように名は残っている。しかしギルドランキングにアインズ・ウール・ゴウンの名が乗ることもない。

公式イベントに参加して楽しむには十分だが、昔のような大暴れの

ようなことはできない。

もちろん、鈴木悟もギルメンとして、このゲームを去ったギルメン達の事情は知っている。仕事が忙しくなったものもいれば、このゲームにモチベーションを維持できなくなったもの、家庭の事情が変わったもの。それぞれ、いろんな理由でやめていった。

鈴木悟は、「人それぞれの人生だから」とやめた理由に優劣は無いと理性の部分が考える。

しかし、鈴木悟の理性や社会道徳といった薄皮を一枚剥き、現れる感情は酷くいびつなものであった。

「なぜ、みんなで作り上げたナザリックを捨てられるのか」

キレイな言葉で言えばこんなものだ。裏を返せば厳しい家庭環境、生活環境から生み出された、家族や仲間という「自分を受け入れてくれる環境」への強い依存である。鈴木悟の中で、アインズ・ウール・ゴウンというコミュニティは家族に変わる、自分を受け入れてくれる場であり、ナザリックとはそんな仲間と作り上げた象徴である。

ゆえに、その場を去るモノへの慟哭や後悔が後をたたない。

ーああ、こんなはずではない。仲間と共に歩めた運命はあったのではないか

その根底は、永劫に回帰することを望むような現在の否定。

だから、いまごろになって忙しいといって後伸ばしにしていたこと。NPCの作成に鈴木悟、いやモモンガは手をつけたのだった。もっともそれは在りし日の楽しかった思い出の残滓を探そうとする行動に等しかった。

モモンガの作るNPCの設定は、三年前に最低限決められていた。

ただ当時は何かと多忙だったモモンガを気遣い、ギルメンたちは防衛に一切参加する必要のない役割を与えた。

宝物殿の守護者

ナザリックの財政面の管理者

そもそも、ギルドメンバーのみが持つ指輪による座標指定転移でし

か入ることができないナザリックの宝物殿。さらに、ノーヒントの暗号門の向こう側。普通の襲撃戦では見つかることさえない場所だ。

そんな場所の守護者としてNPCを、しかもレベル100という最高級のNPCを配置することは、もったいないという意見もあった。しかしモモンガはなんだかんだと良いギルドマスターであった。仲間と良く話し、面倒な意見を折衷し、個性が強すぎる四十人を率いる姿はギルメンに信頼されていた。その結果が、レベル100NPC作成の権利とワールドアイテムの個人所有であった。

さて、いざモモンガはNPCを作ろうとして迷った。

まったくイメージが浮かばないのだ。そもそも、クリエイティブなことを苦手としているモモンガである。感性に任せてなにかするより、総当たりのかマニユアル的に対応するのが性にあっているのだからしょうがないのかもしれない。

そんなわけで円卓の間でウンウンと悩んでいた。

「こんばんわ〜ってモモンガさん。おひさ〜」

ちようどその時、二週間ぶりにInしてきたペロロンチーノがモモンガに声を掛けたのだ。

「おひさです。ペロロンチーノさん。もう仕事はおわりました?」

「二応棚卸し完了。今日、明日はがつつり休んで来週からまた地獄が新スタートですわ」

「はは、大変ですね」

ペロロンチーノも久しぶりのInで親友に会えたことで嬉しそうに話す。なによりもモモンガは親友の楽しそうな声を聴いて先ほどまでの陰鬱とした感情がなくなっただけに気が付く。相も変わらず現金なもんだとおもうが、小さな幸せで満足できると考え腹の底に放り込む。

「そういえば、なんか悩んでたみたいなのーションしてましたけど、何かあったんですか?」

「ああ、放置してたNPCを作ろうかと」

「おお、やっつとですか」

ペロロンチーノはオーバーアクションで驚く。

「実際のところ、作るのめんどくさがって実は作らないんじゃないかって賭けてたんですよ。みんなに連絡しておきますね」

「ちよっ。そんなことしてたんですか？」

まあ、そんな軽口をたたきながら、ペロロンチーノがいろいろ脳内の引き出しを開ける。うん、十分にアドバースできそうだ。

「とりあえず、俺たちの時と違って、配置する場所は出来てるわけなんですから、そこで考えてみては？」

「そうですね、ってNPC制作手伝ってもらってもいいんですか？」

「そりゃあもちろん。モモンガさんの手伝ってなかなかありませんから」

ペロロンチーノは他意はなく、純粹に親友の力になればと答える。モモンガもそんなペロロンチーノの心意気を純粹に喜ぶ。

「じゃあ宝物殿にいきましょうか」

「了解」

そういうと二人は宝物殿に転移するのだった。

もつとも、そんなやり取りの一部始終を壁際で控えていた一般メイドは見えており、瞬く間にナザリック中に広がったのだった。

ペロンチーノの提案

「そういえば軍服がかっこいいって言ってましたよね。基本はそれで……」

「以前貸したエロゲーのラスボスいたじゃないですか。軍服キャラで金髪の……」

第四話

コキュートスは、第五層の環境罫であるブリザードが停止された極寒地帯の奥、白銀の大地にそびえ立つ巨大建造物、大^{スノーボールアース}白球の前で今日も佇む。

コキュートスの一日はほぼこの場で完結する。数日に一度、まるで思い出したように第六層を巡回するが、それ以外はこの場で瞑想し、ふと立ち上がると武器を振るう。

刀、剣、小太刀、短剣、ハルバード、槍。

武器は多彩で一本のみのときもアレば、四本の腕全部で別々の武器を持つこともある。あえてルール付けがされていると予想するならば、同じ武器を連続で持っていないことぐらいであろうか。

その姿は雪山にこもる武人。

しかしその心中はこの数年で大きく変わった。

最初は、創造主・武人建御雷の背を追って武器を振るった。一振り一振り、同じ斬撃を出しているはずだが、若干の歪みがあり一振りとして同じ軌道を描くことはなかった。しかし、下賜された武器を振るう喜びもあり、無心で振っていた。

しかし三年前、記録ではあるが武人建御雷の戦いを見た。

それはいままで思い描いていたものとは別次元のものであった。

たしかにコキュートスはナザリツク一五〇〇人襲撃の際、十分以上の活躍をしている。もちろん死んだことで記憶は無くなっているが、記録を確認することである程度は把握している。

だが、武人建御雷の一撃は違っていた。

正確には、プレイヤーが数多のスキルと装備で基礎ダメージとクリティカル値を上げ、さらに相手の種族的、装備的弱みに正確無比な一撃を加えた際に発生する大ダメージ。簡単に発生するものではなく、レベル一〇〇プレイヤーであっても、それが入れば致命傷になるほどのものである。

真なる一撃

それを見た日から、コキユートスは武人建御雷の背中ではなく、その一撃を追い求めるようになった。

気が付けば武人建御雷が、ユグドラシルにログインしなくなっ一年がたった。

まわりの者たちは、去っていく創造主の姿に寂しいや不安などの感情を発露させる中、コキユートスはそのような感情を持つことが無かった。なぜ、何も感じないのかはわからなかった。むしろ悲しまぬ自分は壊れているのかとさえ考えた。

だが、そんなことを考えている時の攻撃はどれも話にならない酷いものだった。

そして三年たった。

コキユートスが瞑想と鍛錬を突き詰めた末に残ったものはたった一つ。

忠の一字

創造主である武人建御雷様ともう会うことはないかもしれない。しかし、あの方の武は自分に受け継がれている。ならば、その武をもって何を成すのか。

それに気が付いた時、放った一撃は空を断ち、音を置いていく一撃であった。もしプレイヤーにその一撃を放っていけば、あの戦いで武人建御雷が見せた一撃に匹敵するダメージをたたき出すだろう。

「モウ迷イマセン」

くしくも、その日、ナザリックでパンドラズ・アクターというモモンガが生み出した存在が宝物殿の守護者となったことが周知された。

最後までNPCを生み出すことを拒否していたモモンガ様が、遂に己が子ともいえる存在を生み出したのだ。それは驚きをもってナザリックに伝わったが、コキユートスがその報告を受けた時は……

「ソウカ」

その一言のみであった。

「(興味は)ございませんか？」

付き従うフロストフラウたちが聞くと、コキユートスは珍しく笑いながら答えた。

「ハハツ。ソウダナ。情報トシテハ興味深イガ、我方忠ニ変ワリハナク、ヤルベキコトニモ変ワリナハナイ」

そういうと、コキユートスは日課である瞑想と打ち込みを再開するのだった。

第五話

ナザリツク地下大墳墓 宝物殿

「ごめん。モモンガさん」

すまなそうな声と共に頭を下げる親友の姿にモモンガは心を痛める。

「いえいえ、リアルのことですしょうがありませんよ」

モモンガは本心とは裏腹に、社会人ゲーマーとして、そして良きギルドマスターとして至極まっとうな受け答えをする。

親友と称するペロロンチーノも、モモンガのそんな演技を見抜いてはいたが、ユグドラシルというゲームにモチベーションを保てないこと、仕事で責任ある立場となり、いい加減本腰をいれなくてはならないこと。少し前、本業の声優の仕事がかなり忙しくなり、引退した姉というある意味で重石が無くなったこと。理由はそれこそ、山程あるがそれを理由にやめていく自分が、残していく友人にかける言葉などない。そんな風を感じたため、いくつかの言葉を飲み込んだ。

「今でもそこそこの金額になると思うので、売り払ってもOKですよ。ほらナザリツクの維持費も馬鹿にならないでしょ」

ペロロンチーノはそういうと、自分のメインウエポンなど財産の多くをモモンガに譲渡する。武装などストレージに入るレベルはモモンガのアイテムストレージに、そしてあふれる分は、宝物殿モモンガ名義の場所に展開される。

そんな光景もモモンガ都合三十回以上見ている。

「そんなことできるわけないじゃないですか」

モモンガは笑うアイコンを出しながら答える。

「じゃあ、やっぱリアルですかね」

「ええ、そのつもりです」

二人が視線を向けた先は、宝物殿の奥、いつしか霊廟なんて名前でよばれるようになった場所であった。そこにはアインズ・ウール・ゴウン最盛期、四十一人の姿を模したゴーレムが残されている。とはいえ、引退したものだけであるが……

「在りし日の栄光か」

「ですね。あの時のわくわくはすごかったな。今でも思い出しますよ」

「かといつて、いま同じことがあってもそこまで楽しめるかは……うん、むずかしいですね」

「まあ、大人になったということかもしれないね」

二人は自重するように笑う。

若かった。

数年前のことなのに、これほどの確に表現できることは、そうそうない。

「しようがないですよ。みんなリアルでの生活があり仕事があり、そして守るべき者がいますから」

「いつまでも子供のようになってわけにはいきませんか」

その守るべきものにナザリックは入らないのかと、モモンガはなんてことを言いそうになる。

もし、ここでモモンガが物わかりの良い社会人という皮を脱ぎ捨て、ギルドマスターという仮面を外すことができれば、また違った道もあっただろう。以前から連絡先としてメールアドレスなどをもらっているが、そのメールアドレスにもありきたりな話題しか書くことができず、モモンガはやはり最後の最後までみんなの頼れるギルドマスターであり、物わかりの良い大人の姿を捨てることができなかつた。

ペロロンチーノが引退し、半年もするとナザリックでアクティブと呼べるログインをするのはモモンガ一人となった。

そのころになると、必要最低限の狩りで金策を終えると、モモンガは宝物殿にこもるようになった。

NPC達はその後ろ姿を痛ましいと思い、自分たちの悲しみなど、モモンガのそれに比べればどれほどのものかと考えるようになって

いた。

実際には、不器用ながらも仲間達のゴーレムを造り、パンドラズ・アクターの変身精度の向上などに精を出し。そしてある時、ぴたりと止まり、思い出に浸る。そんな一日を繰り返していた。

そんな主の姿を見守るのは宝物殿にいるNPC、パンドラズ・アクターだけだった。だが、モモンガの宝物殿での行動が他のNPC達に伝えられることはなかった。

——至高の御方々の別れの言葉と、それを受け止め見えぬ涙を流す主の姿。

——主が時々漏らす弱音や思い。

その全てを受け止めるのは自分であり、伝えるものではないと考えていた。だからこそ、じつと黙り、悠久ともとれる時間を、動かず、ただ一人見守り続けた。

だが、そんな状況に不満を持つものが一人だけいた。

第六話

タブラ・スマラグディナは自分を偏屈で頑固、その上で理屈屋という世間一般でいうメンドクサイ人種であると認識している。社会のルールに乗っけていても、人の足を引っ張るような連中はいくらでもいる。そんなリアルな社会とは一線を画すこのユグドラシルというゲームはわかりやすく、そして自分というものを出すことができた。むしろ、こんな男を迎え入れてくれたアインズ・ウール・ゴウンの面々は、仲間という意識さえしていた。なにより自分という存在を排除せず、仲間たちとの間を取り持ってくれたギルドマスターのモモンガには感謝の念があった。

少なくともこの数年退屈することもなく過ごすことができた。

しかし、仲間たちの引退に伴い、やはり退屈を感じるようになった。

それは誰が悪いわけではない。

時間の流れに伴う環境の変化。

ならば、いままでの集大成を残そう。

たとえだれの目に残ることが無いとしても。

タブラ・スマラグディナが姿を消してからしばらくした頃、至高の御方々の頂点、モモンガ様が子ともいえる存在を生み出したと噂がでる。

多くの至高の御方々が去る中、ついにアウラとマーレの創造主であるぶくぶく茶釜様と、シャルティアの創造主であるペロロンチーノ様が去られたそうだ。

アルベドにとって、それは必要な情報ではあるが重要な情報ではなかった。

今日も数多の報告が情報の津波となって、玉座の間に侍るアルベドの元に集まる。その膨大な情報を取捨選択し、最適化し、ナザリック

の担当部署に効率よく指示を出す。その姿はさながら、先進企業が保有する経営支援AIのようであった。

しかし、それでもなおアルベドの処理能力には余裕があった。

煌びやにシャンデリアで飾られた光のベール。荘厳な彫刻に彩られた柱。壁もその一枚にいたるまで磨き上げられ、その財と技術を見せつけている。しかしそこには世界の至宝の一つであるワールドアイテムと一体化した玉座のみ。

そんな場所で一人アルベドが思いを巡らすのは、皮肉にも己が記憶設定であった。

ナザリツク地下大墳墓の守護者統括という地位に就いている――多くの耳目を集めているという事実を知るため、けして外に見せることはない感情だが、最初は己が記憶タブラ・スマラグディナを奪う存在を憎んでいた。

だれの姿もない玉座の間で何年も一人で居れば、ふと思うことがあった。

シャルティアは恋慕。

コキュートスは忠義。

アウラとマールレは家族愛。

デミウルゴスは叡智の指針。

プレアデスは姉妹愛。

セバスは友愛。

ではあの存在は、私に何を残したのだろうか？

そして、ナザリツクの守護者統括という役目の傍ら、一語一句精査をはじめたのだった。

「三文小説かしら」

それが最初の感想であった。

しかし一年ほど経つ頃、あることに気が付く。

「言葉の並びに法則性？」

言葉の重なり、文字の順列、法則、秘された意味。アルベドが出会った初めての暗号であった。その日からアルベドは暗号の解析に取り組んだ。

きつと、その暗号の先に何かある。それがどんなものなのか、惰性

ともいえる今の生を彩る何かがあるのかもしれない。

そしてアルベドがその暗号を解いたのは、くしくもユグドラシルがサービスを終了する前日の夜だった。

第四章 その先 第一話

ユグドラシル 最終日

ナザリック地下大墳墓 第九層 円卓の間

部屋の中央に黒曜石でできた巨大な円卓が配置され、四十一席で囲まれている。黒曜石の円卓には傷一つなく、細部には、繊細だが精巧な細工が施されている。椅子も一つ一つ統一されたデザインであるが、座るものが決まっているのだろう、特徴的な紋章が一つ一つに彫り込まれている。そして荘厳なフロアのアクセントのように壁際に控える身目麗しいメイド姿のNPC達。

かつて全ての席が埋まり、日々の他愛のない話題から危急の動議まで、さまざまなことを語り明かした場である。

しかし、今はほとんどが空席である。

「リアルで転職されて以来ですから、どれぐらいになりますかね？
二年ぐらい前ですかね？」

「あー、それぐらいですねー。うわー、そんなに時間が経ってるんだ」
そんな会話するのは死の支配者^{オーバード}モモンガと、古き漆黒の粘体^{エルダー・ブラック・ウーズ}ヘロヘロの二人である。

気が付けばユグドラシルが稼働してから十数年。隆盛を極めたと評しても良いほど人気を博したが、好みの移り変わり、陳腐化、新アイデア、新技術、新要素、そしてリアル事情。挙げればきりがな
いさまざまな事象、つまり時間の流れに勝つことはできず、半年前にサービス終了がアナウンスされた。

そしてついに今日がユグドラシル最後の日となった。

「本当は最後まで一緒にいたんですけど、流石にちよつと眠すぎて」
「あー、お疲れですしね。ゆっくり休んでください」

モモンガとヘロヘロは、旧交を温めるように、様々なことを話す。最初はリアルの愚痴だった。しばらくすると落ち着いたのか、ユグドラシルの思い出話に花を咲かせる。仲間のこと、クソ運営のこと、多

くの敵のこと、イベントのこと。まるで水瓶のように、様々なことが溢れ出し思い出されては消えてゆく。

それは、今日最終日ということと連絡を取り、わざわざ会いに来てくれ、すでにログアウトした二名の仲間にも言えることであった。

「そうですか。……でも正直ここがまだ残っているなんて思ってもいませんでしたよ」

いつしか、水瓶も底が見える。

その言葉にモモンガは傷つく。もちろんへ口へ口がけして嫌味を言っているわけではない事などわかっている。ただ、築き上げた仲間との絆の形をなぜ捨てられるのか？ そんな思いが沸き上がり不快感となり胸を焼く。同時に社会人として長年磨き上げ叩きあげた常識という仮面が、現実と虚構の選択、ならば現実を選択するのが当たり前だと囁く。そして目の前に座るへ口へ口にも生活があるのだからと、不快感を腹の底に落とす。

「モモンガさんがギルド長として、俺たちがいつ帰ってきてきても良いように維持してくれていたんですね。感謝します」

「……皆で造り上げたものですからね。誰が戻ってきてきても良いように維持管理していくのはギルド長としての仕事ですから」

「またどこかでお会いしましょう」

しかし、続く言葉はモモンガの心を救うものであり、それで残酷な終わりを告げるものであった。

そして、その終わりを玉座の間に侍る一般メイド達はずっと見ていた。

一般メイド達の見たことは合間合間の入れ替わりの隙をつくように、ナザリツクに伝えられた。もちろん、意味のわからない言葉が多い。

しかし、モモンガと、久しぶりに訪れていたいたいた至高の御方々の言葉を聞く限り一つの結論にたどり着かぬものはいなかった。

――今日がこの世界最後の日

それが文字通りの意味なのか、別の意味を最後と称しているのかは

わからない。ただ、何かしらが終わるといふこと、そのことだけはNPC達も理解することができた。

その事実不安を感じるものもいた。

しかし、ナザリックに生きるものは、真の意味で終わりというものを知らない。正確には生まれてからずっとナザリックのNPCとして活動しているからだ。そして唯一の死ともいえた一五〇〇人のプレイヤー襲撃事件でさえも、時間を置いて全員復活した。加えて復活の代償ともいえる死亡直前記憶の欠落は、自分は死んだという事実のみを残し死んだという実感を奪い去ってしまい、死や終わりというものの根源的な恐怖や悲しみ、なにより仲間や身内の死すら正しく認識することができないでいた。

もちろんNPCなら当たり前である。

そして当たり前だからこそ、終わるといふことを想像することができなかった。

むしろ、モモンガ以外の至高の御方々との束の間の再開に交わされる言葉の端々から、リアル現実という世界で、ヘロヘロ様を含め多くの方が、戦い続けていること。その戦いは世界や生命を生み出すほど強大な存在でさえも、心身共に疲弊していること。

それは、創造主に捨てられたと感じていたNPCでさえ、ナザリック己が城に戻ることができぬほど苛烈で過酷な戦場に身を置く創造主の姿を彷彿させた。

そんな思惑が巡るNPC達の中一人だけ、まるで今更知ったのか一人佇む者がいた。

ナザリック地下大墳墓 玉座の間

多くのNPC達は不安と至高の御方々の境遇に涙し、そんな中でも残りナザリックを導いてくれるモモンガに感謝している頃、大墳墓の最奥で一人、アルベドは佇んでいた。

「ああ、モモンガ様」

その一言にどれだけの思いが詰め込まれているのかは、凡人に推し量ることはかなわない。比較対象の無い中、己にあたえられた膨大な感情と来歴・知識を設計を分解し、分析し、構築し、選別し、そして探求した結果、つ

い数時間前にタブラ・スマラグデイナの残した思暗号いを読み解いたのだった。

それはあるつまらぬ男の独白であり、そんな男が救ってくれた相手へ贈る精神的な愛にも近い感謝。

そして気付かれることなど無いことを分かっているながらも、残さずにはいられなかった情熱とも呼べる熱量をもって生み出され、消え去るべき花嫁。

——それがアルベド自分であること

アルベドは、自分の創造主タブラ・スマラグデイナの事をなんと無様で不器用な男だろうかと考える。己の感謝や愛情すら相手に伝えることができず、その全てを作品アルベド達でしか表現できない。そしてその表現された作品はついに日の目を見ることなく朽ちるのだ。

己を知ったアルベドは願わずにはいられない。

「モモンガ様に会いたい」

生み出された時と数年前に一度だけしか目にしたことのないモモンガの姿を瞼の裏に浮かべる。

「モモンガ様に触れていただきたい」

周りはきらびやかな永続光に彩られたシャンデリアに照らされ、インテリアの巨大水晶が美しい光のカーテンを生み出す。しかし、長く、それこそ数年も誰とも会うことがない孤独の中にいた。

「モモンガ様のお声を聴きたい」

きつとモモンガが声をかけてくれれば、NPCにとつて最大の禁忌であるプレイヤーへに声をかけることさえできると確信している。

「モモンガ様。モモンガ様。モモンガ様。モモンガ様。モモンガ様。モモンガ様。モモンガ様……」

同じNPCとさえほぼ顔を合わせることもない地下深く、アルベドはモモンガの名を呼ぶ。もちろんその声を聴くものなどない。そのか細い声は、巨大は扉に遮られ掻き消える。それが何よりも不快であり、苦痛となってアルベドに襲い掛かる。しかし自分の創造主タブラ・スマラグデイナの情念、モモンガへの思いを知った今、抑え込むことができなかった。

それからどれほどの時間がたったのだろうか。

数分程度だろうか？ 数時間だろうか？

その時NPCの本能と呼ぶにふさわしい機能が呼び起こされ、先ほどまでうわ言のように紡がれたモモンガを呼ぶアルベドが口をつぐむ。

そして目をむけるとそこにはセバスとプレアデス達を引き連れ、扉を開ける愛しきモモンガの姿があったのだ。

第二話

ユグドラシルのサービス終了日、残す時間はあと少し。

モモンガは最後の時間をどう過ごすか考えた時、浮かんだのは最初で最後ではあるがギルド長らしくというイメージが浮かんだ。いままでも仲間達がいるからギルド長として調整役に回るべきと考えて行動していた。しかし最後の仲間が去った今となってそんな仮面さえ必要とせず、最後の時間をギルド長らしく迎えよう。そんな風に考えたのかもしれない。

最後とばかりにモモンガが所有する最高の装備、ネックレス、小手、ブール、マント、上着、サークレットなど全て最高級品を示す神器級ゴツゴツで統一する。

そしてギルド武器、スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンをその手に握る。その能力とは裏腹に、危険性から造り上げて一度も持たれたことの無かった最高位のスタッフ。そんな曰くがある武器がサービス最終日に本来の持ち主の手に握られたことは、ある意味で皮肉だったのかもしれない。膨大に上昇するステータスを見ながら、モモンガは仲間と造り上げた達成感と同時に、現状の寂しさを感じるのだった。

「ふむ」

そんな風に意気込んで円卓の間を出たモモンガだが、目の前には頭を下げる執事達がいた。

ここ数年は転移魔法でナザリック内を移動していたため、直接このフロアを歩くことは久しぶりであり、彼らのようなNPCの存在を忘れていた。しかし、見れば様々なことが思い出される。NPC彼らも、長い年月本来の役目を果たせずここで待っていたのかもしれない。そう考えると、モモンガは急にNPC達に親近感が沸いた。

「ギルド長たるもの、NPCみなを働かせるべきだな。付き従え」

そう威厳のある言葉を口にする。もちろんモモンガはその偉そうな態度にツツコミをいれるのだが、何も言わずただ命令を待つセバス

たちプレアデスらNPC達は命令に声にならぬ歓喜の声をあげながら一度頭を下げる。もちろん彼らの本来の役目は拠点防衛である。しかし、上位者からの念願の命令の前に無意味とばかりに付き従う。そんな一行を引き連れ、モモンガは様々な出来事を思い出しながら最深部に向かうのだった。

ナザリツク地下大墳墓 玉座の間

そこは数百人が入ってもな余りある広さと、見上げるような高さのある天井。白を基調とした壁には、金を織り交ぜた細工が施されている。天井から吊り下げられたシャンデリアは七色の宝石から削り出され、複雑で幻想的な輝きをはなっている。

なにより目に付くのは、最奥に位置する巨大な玉座とそこに達するまでの柱から吊り下げられた四十一枚の巨大な旗である。

巨大な旗は一枚一枚、金と銀をふんだんにつかった刺繍がそれぞれ違った紋章を描いている。それはかつての仲間達のシンボルであり、彼らが所属していた証拠ともいえる品であった。

そして天を衝くような背もたれ、巨大な構造物と合一した玉座にはだれもがため息を漏らす。それは荘厳なデザインというだけでなく、見るものが見れば、世界の名を冠するワールドアイテムの一つであることがわかる代物だ。

「おおお……」

その荘厳さにモモンガは感嘆の声を上げ、ゆつくりを玉座に向けて歩みをすすめる。そしてセバスやプレアデス達は、その喜びを噛み締めながら付き従う。

そんなモモンガの姿を目にし、喜びに震えるものがいた。

アルベドは先ほどまで狂おしいほどに感じていた孤独が消えてなくなつたことを感じていた。なぜならば、もう会うことは無いとさえ考えていた愛する^{モモンガ}方が、突如現れたのだ。それこそ、いもしない神が願いをかなえてくれたと思うほどに驚き、そして歓喜する。

しかし、一歩一歩近づくモモンガにアルベドは声をかけることができない。

手を伸ばし、その御身に触れることさえできない。

それが歯がゆく、アルベドはモモンガの名を呼ぶ。しかし、それが言葉となつて口の上ることではない。

無限とおもえる数十秒が過ぎると、モモンガはアルベドの目の前まで迫る。そして、付き従うもの達に待機を指示し、優雅な仕草で玉座に腰を下ろす。アルベドはその瞬間、座ったモモンガに対し体を向け、侍る者として最大限の笑みをうかべ歓待する。

「どんな設定をしていたかな？」

モモンガは玉座に座ると、ふとアルベドを見て口にする。なんせこの部屋に来たのは記憶の限り数えるほど、下手すれば一・二回かもしれない。そんな状況でアルベドの存在や守護者統括という設定は知っているが、設定や外見などあまり覚えていなかった。加えて、仲間のタブラさんが相当つくりこんだのだろう、見目麗しいという単語で片づけるのはもったいないほどの容姿と愛らしい仕草に、つい気になったのだった。

もし、それが普段から見慣れたNPCであればそんなことを想うことさえなかっただろう。しかし最後の瞬間を待つモモンガにとって、いわば暇つぶしのような感覚でアルベドに手をのばす。

モモンガの指がアルベドの心に触れる。

その瞬間、膨大な快樂となつてアルベドの全身を駆け巡る。もしNPCとしての制限された時間でなければ、嬌声を上げ、その場にへたり込んでいただろう。この時ばかりは、普段は煩わしいと考えていたNPCの制限というものにアルベドは感謝した。

モモンガはアルベドの情報を確認していると、まるで一大叙事詩のような超大作の文章が現れる。アルベドの創造主がタブラであることを思い出し、同時に設定魔であることに気が付く。時間もないことから、流し読みを開始する。もちろんその行為はアルベドにとつて己が身も心をさらけ出すに等しい行為。羞恥とも喜びとも快樂ともつかぬ感情の放流の中、モモンガの名を呼ぶアルベドはある意味で望んだ幸せを享受するのであった。

「……………」

しかし、モモンガは最後で素っ頓狂な声を思わず上げる。

『ちなみにビッチである。』

アルベドの設定の最後の言葉。モモンガは設定を斜め読みし、できる美しい女性という印象をアルベドに持っていた。しかし最後の単語の意味を理解しかねていた。なぜなら、ビッチという単語をモモンガは罵倒などの単語としか認識できなかったからだ。さしものタブラも朽ち果てる予定の作品を、その送り先ともいえるモモンガが見たが、ある意味でフレイバーのような単語で誤解するとは思ってもしなかった。

しかし、そこからモモンガはタブラも予想外の行動にでた。

「変更するか」

そう、罵倒と勘違いした一文を、タブラが間違えて入れた一文とし、どうせ最後だからというよくわからない理論で変更することとしたのだ。

さすがにアルベドも、見られるだけでもアレだったのに、直接触れられるとは思わず息も絶え絶えにモモンガに熱い視線を送る。

そんな視線の意味に気付くはずもないモモンガは、問題と感じた一文を削除する。しかしあまりにも設定の限界文字まで書き込まれたところに生じた空白は、凄く醜いものにみえた。欠けてしまった芸術品とも言うべきか、画竜点睛を欠いたというべきか。そこで何とかすべくモモンガはキーボードをたたく。

『モモンガを愛している。』

「うわ、恥ずかしい」

まるでアルベドという理想の容姿と性格をもった女性を恋人として造り上げた恋愛小説。そんなものを書き上げたような恥ずかしさにモモンガは悶絶する。あまりの恥ずかしさに元に戻そうかとするが、誰も見ておらず、あと少しでサービス終了と共に電子の藻屑となくなって消えていく。この恥ずかしさもすぐに消え、思い出という煌びやかなものになるだろう。そう考えそのままにすることとした。

しかしアルベドだけは違う。

愛するモモンガからの言葉。

消え去る最後に与えられた告白。

きつと、この言葉があればどんな最後を迎え、涙しようとも寂しくはないだろう。なぜなら、今、この瞬間だけは、アルベドとモモンガは相思相愛になれたのだから。もちろんそれがモモンガにとって過ぎ去る時間の一コマであっても、アルベドにとって永遠の別れであってもだ。生み出された意味が成就したのだ。それ以上望むのは野暮というものだろう。

しばらくするとモモンガは背を玉座に任せ、ゆっくりと天井に顔を向け、掲げられた旗を見ながらギルドメンバーの名を呼ぶ。そして最後に一言呟く。

「そうだ、楽しかったんだ……」

そんなモモンガの姿にNPC達は、最後の時が近いと感じる。

これが終わりか。

これが終焉か。

こんなに泣かしむ至高の方の姿を見なくてはならないのか。

先ほどまでの歓喜とは真逆の怨嗟とのとれる感情が広がる。そして願わずにはいられなかった。

終わらないでほしい、

この刹那が続いてほしい、

この時が永遠に続いてほしい……

最終話 B エンド

「どうかなさいましたか？ モモンガ様？」

モモンガこと鈴木悟は、ユグドラシルからのリンクが切り離されたことで、0時すぎに自分の部屋で目を覚ました。目覚める瞬間、まるで鈴の転がるような、それでいて蠱惑的な女性の声を聴いた気がするが、覚醒する意識に押し流されるように記憶の彼方へ消えていく。

目を開けば何の変哲もない部屋が広がっている。強いて言えば私物が少ないわりに、ダイブユニットを搭載した高級なりクライニンングシートがあるぐらいだろうか。

そんないつもと変らぬ現実にもどった鈴木悟は、そのまま目を閉じる。

ユグドラシル。自分の人生においてももっとも長く熱中したものが先程終わった。楽しい余韻でもと思ったが、いざ思考をめぐらせると残ったモノはぽっかりと胸に空いた穴だけだった。

例えば先程仲間との会話の中にあつた楽しかったイベントについて再度思い返しても、あの時のような感動はなかった。

例えばまたかけがえのない仲間と共有したイベントを思い出しても、あの時は苦勞し、勝利した喜びだけで、震え上がるような歓喜はなかった。

なにより、先程まで仲間と共に作り上げたナザリックが消えたことに対する憤りや無念感など、今日を迎えるまで燻っていたものがすっかり抜け落ちてしまったのだった。

「これが胸に穴が空くということだろうか？」

そのように言葉にしてみるが、いまいちわからない。

はるか過去に母が亡くなった時と比べてみるが、あの時の方が焦燥感にかられていたような気がする。もっとも趣味と肉親の死を同列に扱うのはいかがかと苦笑いを浮かべる。

「案外こんなものだったのだろうか？ それともコレが終わるってことなのか」

情熱という熱量を感じることができなくなった瞬間、ユグドラシル

は鈴木悟にとって、もう一つの世界からゲームへと変わったのかも
れない。そう何となく結論付けたとき、メール着信のランプに気が付
く。

「うわ、けっこう来てる」

鈴木悟は携帯端末を手に取ると、メールを確認する。どうやら、最
終日の連絡をしたギルメン達が、今日は都合が悪いという返信にはじ
まり、まるでチャットのようなやり取りがはじまり、最後には二週間
後にOFF会をしないか？ という方向でまとまったようだ。

たしかにOFF会に指定された日は三連休の真ん中で、多くの人間
があつまりやすい日であった。どうやら会場はMRカフェの個室の
ため、当日現地にこれない人もダイブすれば、アバターで参加できる
形式らしい。

なにより、すでに8割が参加表明をしていることに気が付いた時
「ユグドラシルの最終日に来てくれればよかったのに」

と、やるせない気持ちを口にする。もつとも、今日は月末の平日。
やはり集まりやすさという点では段違いだ。なにより、鈴木悟自身も
年休を強引に勝ち取って参加したぐらいなのだ。そんなことをゲー
ム自体辞めた人間に期待するのは酷というものだ。

「参加しますっつと」

どうやら幹事はたっちさんとウルベルトさんらしい。二人がケン
カしながら調整するのを脳裏に浮かべながら、就寝の準備をするの
だった。

■■■■■■■■■■

アインズ・ウール・ゴウンのOFF会はアコロジー最下層のうら
ぶれた場所にある酒場、BARナザリックで行われることとなった。

普段は別の名前の店なのだが、今日は貸し切りということ、BAR
ナザリックという簡単な造りのプレートが扉に飾られていた。聞
けば、ギルメンの知り合いが経営する店らしく、どうせならと協力し
てくれたそうだ。

そんな店の扉をくぐり、エア洗淨ブロックの先、そこは外界と切り
離された落ち着いた空間が広がっていた。

マホガニーと思われる年季の入ったカウンターに、四人掛けのテーブルが二セット。奥には小さなピアノと大きな壁掛けの時計が一つ。目を引くのは空間を仕切る様に置かれた数多くの鑑賞樹と、窓際にところ狭しと置かれたハーブのプランター。自然が黄金に等しい価値を持つこの都市で、アーコロジー内の自然公園などを省くとこれほど緑を身近に感じる空間は少ないだろう。

「いらっしやいませ」

年季を感じるバリトンボイスに呼ばれ視線を向ければ、カウンターに一人のバーテンダーがいた。年のころは四十を超えているだろうか？ 落ち着いた雰囲気とぴしっと伸びた背が、年齢をより一層わからなくさせている。

「本日予約したモノですが」

「そうですか、ではネームプレートにキャラクターの名を書いていただいたら、奥へどうぞ」

「あ、はい」

鈴木悟は促されるまま、ネームプレートにモモンガと書き胸につける。なんでこんな名前にしたのだろうか？ 若干の恥ずかしさを感じるが、よく考えればギルメンはもっとヒドイ名前もいるのだから、まあいいかと開き直る。

そして扉をくぐると、そこにはナザリツクの円卓の間を感じさせる壁のデザインが投影されていた。

なにより、すでに集まっていたメンバーを見ればわかる。

「ペロロンさん。茶釜さん。たっちさん。ウルベルトさん……」

「お？ やつと主役がきたな」

そういうと、いかにもオタクとわかるキャラもののTシャツを着た、残念な美青年が声をあげる。それにつられ、みんなが顔を鈴木悟、いやモモンガのほうに向ける。

「いや〜モモンガさんに会いたくって気が付いたら早く集まっちゃいましたよ」

「ブループラネットさん」

ダイブ参加とおもわれる、ユグドラシルのキャラに似せたアバター

のブルー・プラネットが声をかける。よく見れば部屋のそこかしこに設置されたカメラや空間投影スクリーンを使って、ダイブ参加者も臨場感を共有しているようだ。

「現場に行けば酒が飲めるのに、リンク参加を選択して失敗でした」
そんなことを言うのは、先日同様、若干死にそうな声で話すスライム。ヘロヘロであった。

「じゃあ、モモンガさん駆け付け一杯のんで、開会の挨拶をお願いね」
そういうと小柄の美少女というには少々年齢を重ねている女性、ぶくぶく茶釜が何の酒かわからないジョッキを持つてくる。モモンガはジョッキを受け取ると、一気におおる。普段は飲まない酒が喉にながしこまれる。それはビールのような、それでいながら甘い不思議な味が一気に胸を満たす。

「茶釜さん、これ何ですか？」

「このマスター特性のビールカクテル。度数高めのブレンドだけど甘口にしてもらったから、普段飲まないモモンガさんでも飲みやすかったでしょ」

「ちよ……」

モモンガは度数高めというところにツツコミを入れようとするが、かわいくウイंकをしながら女性陣の方に戻っていく茶釜を捕まえることができなかつた。

「はあ〜」

「じゃあ挨拶と乾杯の音頭よろ」

まわりはすでにそれぞれの酒を手を持っている。ダイブ参加のメンバーもみんな飲み食いでできないが、視線は感じる。そう、久々に集まった仲間達の視線。気が付けば、バーテンダーが新しい酒をもってきており、モモンガも渡される。

「なんで最終日来てくれなかつたんだよ。寂しかったぞ！ このやろ〜。乾杯！」

「『乾杯！』」

すでに最初の一杯で酔いが回ってしまったのだろうか？ ここまでくればすでにヤケとばかりに、モモンガは叫び、周りは一斉にグラ

そう言うのとたち・みーは守秘義務の範囲内で事件の状況をおしえてくれた。もちろんこれがかなりグレーな行為であることはモモンガもわかっていたが、友人が心配してということ、なにも言わず耳を傾ける。

どうやらユグドラシルを運営する会社は、ゲームの運営の裏で電腦倫理法に違反する実験、ゴーストダビングの実験を行っていたようだ。そして最終日のサービス終了コードに合わせ、最後のコマンドが実行されたようだ。

「意識不明ってのは」

「報道発表ではゴーストダビングの影響と言われている。実際は専門家が調査中だがな」

「じゃあ、この集まりは？」

モモンガは先ほどまでのほろ酔い気分が覚めるのを感じながら、嫌なことを口にする。しかし、ウルベルトはにやりと笑る。

「これは偶然だ。なんせ事件が表ざたになったのは先週。正式な報道発表は昨日だ」

「そうですか」

「まあ、もし気になることや、問題が見つかったら連絡をください。捜査本部の方に連絡して検査医療の手配といたしますから」

たち・みーはモモンガとのやり取りに問題ないと判断し安心したのだろう。にこやかに笑いながら、仕事用と思わしき名刺を渡してくる。

「っていつでも気を付けろよモモンガさん。警察の連中、いまだにユグドラシルの量子サーバを止めてないんだぜ。原因究明といいながら、ゴーストダビングの実験結果の回収をしてるって話だ。信用しすぎるなよ」

「あれは、捜査上必要な処理と聞いている。なぜそんな風につつかかるんだ」

「はっ。捜査上の処理といえば、大抵のことができることをいいことに、技術の回収と独占、横流しをしてる連中の言うことは違うな」

気が付けば、たち・みーとウルベルトが酒を片手に嫌味の応酬を

はじめる。まわりも、ああ、いつものことかと割って入らず放置する方向に向いているようだ。それを見たモモンガは、まるでユグドラシル時代のようだと感じながらも、仲裁にはいる。

そしてまた酒を酌み交わしながら、昔話がはじまるのだ。

そんな楽しい時間の中、モモンガはふとあることを思い出す。

「そういえば、サービス終了間に女の人の声を聴いたような……」
「モモンガさん。グラス開いてるじゃないですか。これおいしいですよ。じゃあそろそろモモンガさんのいいところ、見せてもらいましょうか！」

幸いにもそのセリフは、ペロロンチーノの酒瓶片手の叫び声にかき消される。なにより言った本人も苦笑いしながら、グラスと一緒に疑問も飲み込んでしまったため、それ以降思い出すこともなかった。

——Bエンド「現実での再会」

最終話 A エンド

ナザリック地下大墳墓 玉座の間

ナザリック地下大墳墓の転移と思わしき事象から四日目の夜

モモンガは玉座の間にナザリックに所属する者たちを集め、アインズ・ウール・ゴウンと名を変えたことを宣言した。そしてこの名を世界に知らしめるよう厳命する。それは、自分と同じ境遇のプレイヤー、それもアインズ・ウール・ゴウンの仲間達の手がかりを期待してのことであった。

しかし……。

いくらNPCに傅かれ、支配者として演技せざるえなかったから。いくら異世界転移と思わしき事象に巻き込まれ狼狽していたから。いくらゲームのキャラクターとなって混乱していたから。

理由はいくらでもつけることができるが、はたして現代社会の一般人として最低限培われた倫理観や常識をかなぐり捨てて、大勢の人間を殺し、さらに拷問する命令を平然と出せるものだろうか？

アインズはふと四日間のことを振り返りそんなことを考える。

しかし結論はでなかった。比較対象がないこともあるが、自分の胸の中にあるのは仲間のこと。そして仲間と造り上げたナザリックのことが全ての中心であり、リアルでのことなどまるで遠い過去のようにさえ感じられるのだ。たった四日で人間はそんなに変われるのだろうか？ 疑問にこそ思うが、同時に冷静な自分が囁くのだ。まずは目の前の問題から対処せよ、仲間と生み出したナザリックを守れと。ゆえにアインズは第一歩となる命令を出し、私室に戻ることにした。

だが、NPC達にとってはそこからが本番であった。

デミウルゴスが伝えたアインズの世界征服宣言に歓喜したNPCたちは、それぞれの任務を遂行するために持ち場へと戻っていった。しかし、玉座の間に残る者もいた。

トウルヴァアンバリア
真祖 シヤルティア・ブラッドフォールン
ヴァーミンロード
蟲王 コキユートス

ダークエルフのアウラ・ベラ・フィオーラとマーレ・ベロ・フィオーレ

アーチデヴィル
最上位悪魔 デミウルゴス

執事のセバス・チャン

戦闘メイド プレアデスの面々

そして

サキユバス アルベド

一部の例外はあるが、すくなくとも現在稼働するナザリツクの最高戦力といっても良いNPC達である。

「アルベド。一つ質問していいでありますか？」

「どうしたのシャルティア？ 改まって」

プレアデスを含め、このメンバーが一同に集まることは初めてのことである。このタイミングでわざわざアルベドに質問をするのだから、それなりの疑問であろうと周りのものは見守っている。

「今回の異変が発生したと思わしき四日前、アルベドはわたしらを第六層に集めた時、追加でこう言ったでありますよ」

「ーもう私達の軛はありません。自由に話すことも、自由に触れることも、そして自由に動くこともできます。それを念頭に行動なさいなぞ、それがわかったでありますか？」

その言葉はプレイヤーの前で会話をすることをはじめ、NPC達にとつてありとあらゆる禁忌や制限は無くなったと宣言したものだ。もちろんそれを何度も破ろうとしたNPCも多いが、その行動は一度も成功することはなかった。質問したシャルティアも別れを言うペロロンチーノに置いていかないと叫び抱き着こうとしても、指一つ動かすことも、声一つ上げることでもできなかったのを鮮明に覚えているからだ。

もちろんシャルティアはアルベドのことを責めているわけではない。しかし長年拘束されていた禁がいきなり解かれたのだ。それをどうやって知ったのか、純粹に気になったからある意味で空気を讀ま

ずに質問したのだった。そしてその疑問は、コキユートスやデミウルゴスをはじめ他の守護者達も共通していた疑問であった。

「モモンガ様。いえ、アインズ様があの日お困りのようでしたから、お声がけしたまですよ」

さも当然のように、蠱惑的な笑みをいつも通り浮かべながらアルベドは答える。しかし多くのNPC達も言葉にこそしないが、その禁にどれほど苦しめられたかを覚えている。それをいち早く気が付いたのだ。

「あの日、たしかセバスたちも侍っていたのではないですか？」

「はい。たしかにアルベド様はアインズ様にお声がけされておいででしたが、しかしながら私達はそのあと直ぐ任務を拝命したので、ほぼ何も知らないといましようか」

デミウルゴスの質問にセバスが答える。そしてセバスの言葉を肯定するように、プレアデス達も頷いており、偽りはないのだろう。だからこそ疑問が残る。アルベドがアインズに対して声をかけたことはわかった。しかし他の確認をいつできたのか？

「まさか、セバス達が退室したあとアインズ様に破廉恥なことをしたんじゃない……」

シャルティアが気が付いたとばかりにアルベドに詰め寄る。実際はアインズがアルベドのいろんなところに触れたのだが、そんなことをわざわざシャルティアに教える必要はないとばかりに、ほほえんで煙に巻くアルベド。

「そもそも出会いがしらアインズ様に抱き着いたのはシャルティアのほうじゃない」

「それは、感極まったということでありんす！」

そんなシャルティアを見ながらアウラが若干呆れたように口にする。その言葉にシャルティアは苦虫をかみしめたように嫌そうな顔をしながら叫ぶ。

「まあ、シャルティアのことは置いておいて、私からもいいかな？」

「あら、デミウルゴスも？」

「君が口止めしている終末の件。それはもう過ぎ去ったと考えてもよ

いのかな？」

少なくとも四日前。

NPC達はこの世界が何らかの終わりを迎えると考えていた。なにより、アインズや最後に訪れたプレイヤー達の口ぶりから、もし世界が存続したとしても、そこにアインズの姿は無いとさえ考えていた。

しかし、結果は違った。アインズは現実という世界に戻ることもなくなり。NPC達を縛っていた制限もなくなった。

喜ばしいことだ。

しかし、喜ばしいからといって、何故という疑問が無くなるわけではない。それはナザリックにおいて最高の英知を与えられたデミウルゴスであつても変わりはない。むしろ未知は、気が付かぬうちにナザリックの障害となりえるのではないかとさえ考えているのだ。

「そうね。アインズ様は私達の行動、言動、それらを見ながら何かを確認されている節があるわ。それに普段であれば定期的に現実の世界とやらに戻られていましたが、すでにこの四日間、戻られた形跡はないわね」

アルベドはそこまでいうと、セバスやプレアデスの面々の顔を見る。そして、全員が是と答える。

「そして、アインズ様がお言葉、いままでの行動からすれば……」

「現実への移動ができなくなった。それはナザリック地下大墳墓の転移という問題とリンクしている可能性が高いということかね？　しかしそれはあくまで事実の積み重ねでしかないのでは？」

「その通りよ。だからこそ私達は私達で情報を集める必要があるの。アインズ様の深淵なるお考えは広く世界を見通すことでしよう。しかし矮小な私達はそれほどの智謀も知識もない。ならば」

「我々は、アインズ様がお気にもしない、それこそ足元の石ころのような情報を余さず集め、転移の原因、そして終末などについて調査すべきということか」

「その通りよデミウルゴス。終末が本当の意味で去ったのか？　それとも、それを誘発した存在がいたのか？　どんな状況かはわからない

い。だからこそ私達の手でアインズ様のお役に立つべきではなくて？」

アルベドとデミウルゴスの言葉の応酬は、いわばナザリックにおける方向性のせめぎあいともいえる。まわりのものからはどちらのセリフも理があるように見えているのだ。

もつとももし、話術に造詣の深いものがいれば、双方がわざと論点をずらしていることに気が付くことができるだろう。

「君の意見は分かったよ、アルベド。しかし、至高の御方々に我々が知ることをご報告しないのは不忠にあたるのでは？」

他の面々は理解していないようだが、デミウルゴスにとってアルベドの考えというものの自体を否定する気はなかった。むしろ気にすべきは最後の言葉、この行動が不忠にあたるのではないか？ この一言に集約される。

「貴方は思い悩む主に、自分がわからないからと精査も終わらぬ、そして心労を重ねさせるような情報をご報告し、問うことが忠義と考えているのかしら？ 少なくとも、言葉の端々にいまだ他の至高の御方々のことを気遣われていることは明白。そんな中に、至高の御方々がお話されていた終末とは何だったのですか？ と聞けるほど私は恥知らずではないわ。どうみてもアインズ様の御心に無用の波を立てる行為ではなくて？」

もちろん情報の程度によってはご報告するのも正しい行為かもしれないけどねと、アルベドは締めくくる。

「いいでしょう。いまは緊急時、終末の件も、我らに課せられた制限が消えたことも棚替えしましょう。そのかわり」

「ええ、日々の調査と合わせてこの件についても並行して調査だけはつづけましょう。もう二度と終焉が訪れぬように」

デミウルゴスもアルベドの意見に一定の理解をしめたことで、NPC達の行動方針は決定した。

もしこの時、すべてをアインズに話す事になっていれば、また違った未来もあったかもしれない。それは小さなボタンの掛け違えで翌日には治る程度のものなのか、それとも水面の波紋のように、いつか

大きなうねりとなり波となって帰ってくるのかは分からない。

すくなくとも今言えることは、NPC達はアインズという主を得て、新たな世界に歩み出すために、終末やNPCの縛っていた何かについての優先度を下げたのだった。

守護者やプレアデスらとの会話を終わらせたアルベドは、アインズより与えられたばかりの私室に入る。まだ与えられたばかりの部屋は、調度品など一通り揃えられているものの、個性と呼べるようなものは何一つなかった。

しかし、部屋に入ると鍵を閉じ、さらに可能な範囲で警戒行ったアルベドは、そのバッグから一枚の大きな布を取り出したのだった。それは、先程アインズが破壊したモモンガとしての紋章が刻まれた旗であった。

「ああ、モモンガ様」

そう、この一言が全てを物語っている。

アルベドにとってはアインズではなくモモンガであり、愛すべき相手も敬うべき相手もモモンガなのだ。なにより、自分の中には、あの最後の日にモモンガが設定触を書き換えたたことによって生まれた確固たる縁があるのだ。

そして、その縁が言っている。もうモモンガは現実に戻ることはない。

アルベドにとっては忌々しいことに、アインズはギルドの仲間らの影を追い求めるだろう。本日の命令もその一端であることは明白だった。しかし、それは一時的なこと。何年で培われた友情なのかはわからないが、すくなくともアルベドとアインズの種族特徴をもってすれば、それ以上の時を重ねて少しずつ振り向かせることさえ可能だ。

なによりも創造主タブラの誰に評価されずとも生み出さずにはおれなかった熱量を受け継いだアルベドである。あの終末の直前まで、それこそ狂おしい愛を抱えて消える覚悟さえしていたのだ。

そんな時に生まれたこの奇跡。

なんとしても愛するモモンガを手に入れる。たとえナザリツクの者たちと袂を分かつ事となつたとしても。

薄暗い部屋の中、アルベドはモモンガの紋章を抱きしめながら一人微笑むのだった。